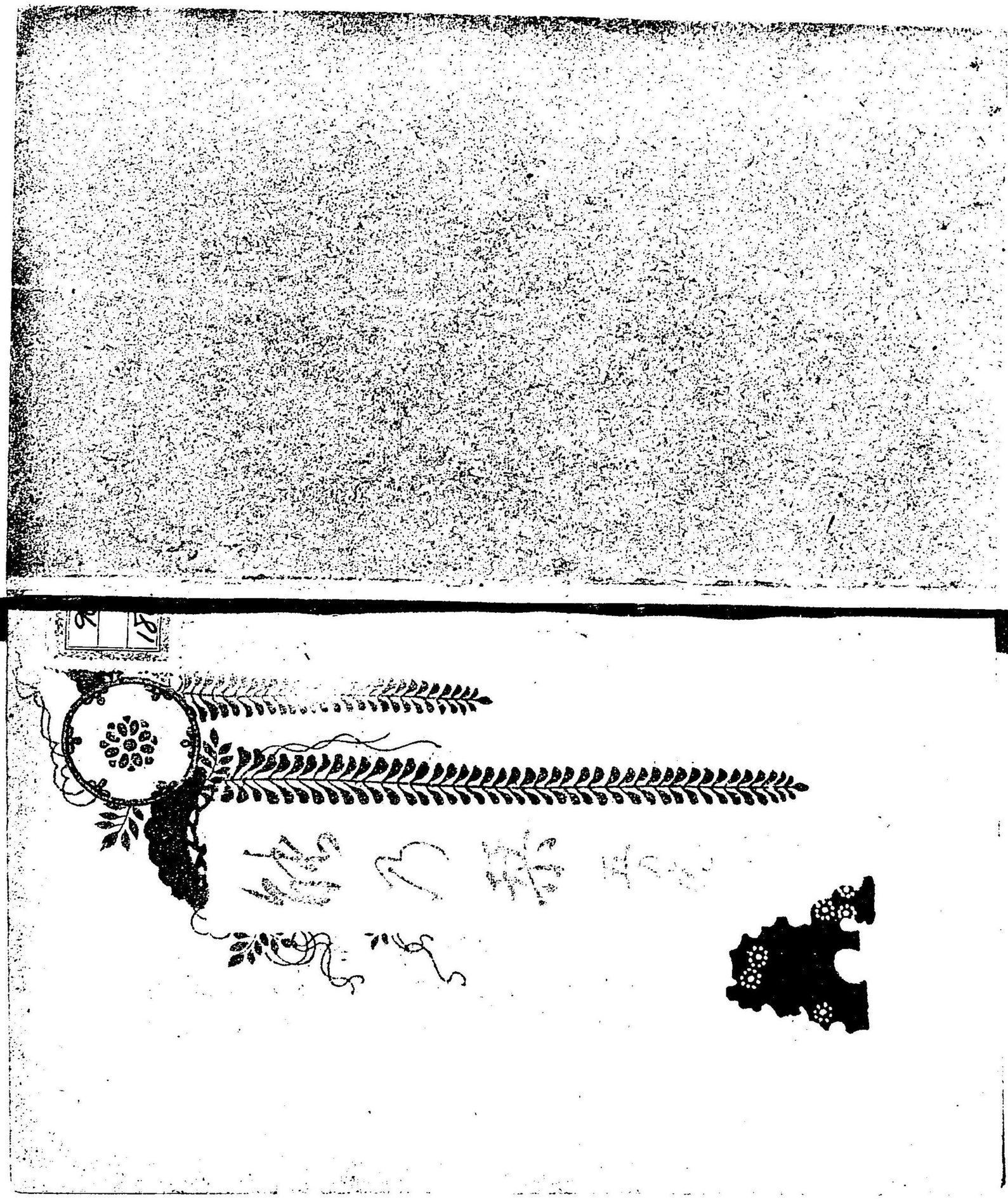


96
185

目次

嵐山……一
敦盛……一四
北條……二九
雲雀山……四二
歌占……五七
小督……六九
賴政……八〇
二人靜……九二
熊坂……一〇二
善知鳥……一一六
項羽……一二八

明治三六

目次

盛久……一四二
遊行柳……一五三
柏崎……一六三
望月……一七八
大瓶猩々……一九八

能の研究　五の巻

大和田建樹著

又は杖

前ヅレ　女（流儀によりてはワキ）

女面　唐織若流

後ジテ　藏王權現

大飛出　赤頭　唐冠　厚板　牛切　狩衣　腰帯　扇

後ヅレ　子守明神

郡鄙男　黒垂　風折烏帽子　箔　大口　長袴　腰帶
扇さし櫻の枝持つ

同　勝手明神

女面　黒垂　天冠　箔　大口　長袴　腰帶　扇さし櫻の
枝持つ

ワキ　官人

大臣烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帶　扇

ワキヅレ二人又四人　隨行者

ワキに同じ

アヒ　末社の神

上り鬚　奠斗目　狂言袴　脚半　水衣　扇

嵐山の花ざかりに見て來れとの勅旨を奉じ。官人其地に至りしに。其花の本山なる吉野の神々あらはれて。神樂を奏し舞を舞ひ。君が代を祝ひ歌ひ給へる心に作れる能なり。脇能の一つに

作物出づ

ワキ出づ

て翁附き禮脇にも用ひらる。太鼓あり。季節は三月。地は山城。囃子方座に着くと櫻の立木の作物正面先へ出づ。次第にてワキワキヅレ出て。高砂の如くの式ありて舞臺に立ちならび。「吉野の花の種とりし。〳〵。嵐の山に急がん」と歌ひ。地謠にて之を返し歌ひ。又ワキワキヅレ同音に返し歌ふ。之を脇能の三度返しといへり。

それよりワキ正面に向ひて。「抑も是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の櫻は。聞召及ばれたる名花なれども。圓滿十里の外なれば。花見の御幸かなひ給はず。さるにより千本の櫻を嵐山にうつし置れて候間。此春の花を見て參れとの宣旨を蒙り。唯今嵐山へと急ぎ候」と歌ひ。道行すみ嵐山に着きたるよしの詞ありて。

シテ出づ

ワキ以下順々に座に着く。

眞の一聲になりてツレとシテと出て。橋掛にて向ひ合ひ。「花守の。

すむや嵐の山櫻。雲も上なき梢かな」と同音にて歌ひ。「千本に咲ける程なれや」とツレ正面むきて歌ひ。又向き合ひ同吟にて。「春も久しき景色かな」と歌ひ。それよりシテはかたげたる箒をおろし。引きずりながら舞臺に入り。ツレは大小座の前舞臺の眞ン中に。シテは仕手柱先に立ちて。「是は嵐山の花を守る。夫婦の者にて候なり」とサシを歌ひ。二人向き合ひ同吟にて。「それ圓滿十里の外なれば」以下下歌上歌を歌ひ。「となせに落つる白波も。散るかと見ゆる花の瀧。盛久しき景色かな」と入りかはりて。シテは眞ン中に。ツレは其右の方に正面先に立ち居ると。ワキ之を見て詞を掛け。「不思議やな是なる老人を見れば。花に向ひ渴仰の氣色見えたり。お事は如何なる人やらん」と問ふ。シテ「さん候是は嵐山の花守にて候。又嵐山の千本の櫻は。皆神木にて候程に。花に向ひ渴仰申候」と答ふ。ワキ「そも嵐山の千本の櫻の。神木たるべき謂れは如何に。」シテ「げに御不審は御理り。名におふ吉野の千本の櫻を。移し置かれし其故に。人こそ知らぬ折々は。子守勝手の神ともに。此花に影向なる物を。」ワキ「げにやさしもこそ厭ふ浮名の嵐山。取り分き花の名所とは。何とて定め置きけるぞ。」シテ「それこそ猶も神慮なれ。名におふ花の奇特をも。顯はさんとの御惠。」シテツレ二人「げに頼もしや御影山。厭きをさまる三吉野の。神風あらばおのづから。名こそ嵐の山なりとも」との掛合ありて。地になり「花はよも知らじ。風にも勝手子守とて。夫婦の神は我ぞかし」と。シテはワキへ向ひ。「音高や嵐山。人になし知らせ給ひそ」と詰足する。

ワキと問答す

打切にてツレは地の前に行き座に着き。シテは「實相の花盛。開くる法の聲たてゝ。今は嵐の山櫻」と。右受けて正面出て開き。「夏箕の川の水清く。眞如の月のすめる世に。五濁の濁ありとても。流れは大井川。其水上はよも盡きじ」と。角とり廻りてワキへ開き。「い

中入

末社

ざ〳〵花を守らうよ」とツレへ向き。「春の風は空に滿ちて。庭前の木をきるとも。神風にて吹き返さば。妄想の雲も晴れぬべし」と。正面へ開きて空を見上げ。千本の山櫻と右を見て。盛の花を見渡す心あり。「此日も既に呉竹の。夜の間を待たせ給ふべし」とワキへ向ひ。「立ちくる雲に打ち乘りて」と。脇座の方より仕手柱の方へ乘り込み。「夕陽殘る西山や」と。橋掛に行き幕すてゝ。「南の方に行きにけり」と正面へ開きて。靜に中入す。來序にてなり。尤もツレもシテの跡より共に入る。

末社來序になりて末社アヒ出て。名乘座に立ちて

「かやうに罷り出てたる者は。三吉野藏王權現に仕へ申す末社の神にて候。さる程に申までもなき事ながら。我住む吉野山は。天下に隱れなき花の山にて。峰も尾上も皆花ばかりにて候。さあるによつて千本の櫻と申して。取り分き隱れもなき

名木なり。之を君聞しめし。叡覽ありたきと思し召せども、聞滿十里の外へは御幸なりがたき故。さあらば千本の花の種を取り。嵐山へ植ゑおかせられ。それへ御幸なつて花を叡覽なさるべきとて。千本の櫻の種を取り。嵐山へ移し給へば。もとより皇の御惠深き故。花も心あつて榮え申す事限りなし。殊更子守勝手の兩神。毎日影向あつて花を守らせられ候間。ふく風も嵐山をばよけて吹き申すにより。花も榮え一段勝れて見事なる容躰にて候。然れば當今に仕へ御申しある臣下殿。花の盛を御覽ありて。御奏聞あれとの宣旨を蒙り。嵐山へ御着にて候處に。子守勝手の兩神御喜び限りなくて。先づ假に賤しき者と現じ給ひ。御言葉をかはし申されて候が。重ねて奇特を拜ませ御申しあるべし。さやうにあらば其間。我等がやうなる末社にも罷り出て。何ぞ一曲仕り。慰め申せとの御事により。是まで罷り出てた。急いで嵐山へ參らばやと存ずる。いや神通を得たれば。刹那が間に嵐山へ着いた。彼の稀人はどこもとに御座あるぞ。

といひてワキを見附け。

「是は如何な事。誠に當今に仕へ御申しある臣下殿にて候ぞ。先はさらびやかな事かな。先づ急いで御禮を申さう。

といひてワキの前に出て兩手つき。

御禮申し候。是は三吉野藏王權現の末社の神にて候。是まで御出でにより。子守勝手の兩神假に顯はれ給ひ。御言葉をかはし申され。重ねて奇特を拜ませ申さうずる。其間只は何とて御座あらうずる。我等にも罷出てゝ一曲をも仕り。御眠りをさまし申せとの御事により。御禮申し上げて候が。何ぞ一曲仕らうか仕るまいか。

といひて。もとの名乗座に歸り。

あゝ一段の御機嫌に申し合せた。何ぞ一曲仕らうか仕るまいかと申したれば。仕れと思召すやら。左の頬がにつこりと致いた。一奏かなでゝ戻らう。目出度かりける時とかや。

是より三段の舞ありて。

「やら〳〵目出度や日出度やな。かゝる目出度き折柄なれば。我等がやうなる末社の神も。顯はれ出でゝ歌ひ奏で。是までなりとて末社の神は。元の社に歸りけり。

と舞納めて。樂屋に入る。

又替間には猿聟といふ物あり。猿の聟入する處を滑稽に作れる物にて。主客とも。猿多く出て。榊など持たせて酒宴する處なり。其詞のみをこゝに示さん。

一聲「今日既に。同壬申の日吉とて。聟入するこそ嬉しけれ。

道行「三吉野の。花の梢を這ひ出でゝ。花の梢を這ひ出でゝ。馬に乘らねど車坂。素袍袴を着ながらも。大口峠打ち過ぎて。猶行く先は橋中の。あめぢまきをもよそに見て。三笠の山に仕居する。木の葉猿をも誘ふなる。嵐の山に着きにけり。

小謡「かけて通へや岩橋の。高間の原は是なれや。神樂歌始めて。大和舞いざや奏てん。シテ「猿子を抱いて。同青松の影に隱れぬ。鳥花をふくんで。碧岩の前に落つなるも。今更思ひ知られたり。花見ずはいかでか。此山に一夜明かさん。シテ「今宵は花の。同下臥して夜と共にながめ明さん。シテ「酒宴半の猿の興。〳〵。さす盃も度重なれば。皆御顏は一ッ所になつて。きつ〳〵と並ばせ給ふ。面白かりける風情かな。〳〵。

シテ「舅は是を見るよりも。同聟殿のつゝ立ち上る。舞の袂の面白さに。出だせる駒のどれ〳〵ぞ。一のへいだて二のへい

だて。三に黒駒信濃を通れ。船頭殿こそ勇健なれ。とまりとまりをながめつゝ。彼又獅子と申すには。百濟國にて普賢文殊のめされたる。獅と獅子とは御使者の者。猶千秋や萬歳と。俵を重ねて面々に。〈〉。樂しうなるこそ目出度けれ。

勝手子守出

下羽にて勝手子守出て。橋掛にて開き留むる。おの〈吉野の花を守る神なれば櫻の折枝を手に持ちたり。地の謠「三吉野の。〈。千本の花の種うゑて。嵐山あらたなる。神遊びぞめてたき。此神遊びぞめてたき」と開き。二人「いろ〈の」と歌ひ。地になりて「いろ〈の。花こそまじれ白雪の。子守勝手の。恵みなれや松の色。〈」と舞臺に入りて開き。「青根が峰こゝに」と歌ひながら。二人左右より向き合ひ。地の「向ひは嵯峨の原」にて行き掛り。「下は大井川の。岩根に波かゝる」と。下の方をさし廻して水の面を見渡し。「龜山も見えたり」と右の方に二足詰め。「萬代と」と開き。「囃せ〈

三段の舞

後ヅケ出ヅキリ

神遊び」と二人とも大小の方向き。「千早振」とくつろぎて櫻の枝捨て。扇ぬき持ち。正面向き開き。達拜三段の舞となる。二人相舞にて天女の舞に同じ。

「神樂の皷聲すみて」と大左右打込開きなど例の如くありて。「感應肝に銘ずる折柄」とさして廻り。「藏王權現の來現かや」と橋掛に向ひ雲の扇すると。早笛になり後ジテ出づ。二人は早笛になりたる時直に地の前に行き。シテは舞臺に入り。「和光利物の御姿」と拍子踏み。「我本覺の都を出て分段同語の塵にまじはり」と開き。「金胎兩部の一足をひつさげ」と扇左の手に横に持ち。左の足と一つに上げ。「惡業の衆生の苦患を助け」と左へ廻り。「さて又虚空に御手を上げては」と兩袖かづき。「忽ち苦海の煩惱をはらひ」と拍子ふみて袖をおろし。「惡魔降伏の正道のまなじりに。光明を放つて國土を照らし」とさしわけして廻り正面に開き。「藏王權現同躰異名の姿を見せて」

と拍子踏み。おの〳〵嵐の山によぢ登り」と二人は入り。シテは櫻の作物の前に行き。乗込拍子二つ踏みて飛び返り。「花に戯れ梢にかけつて」と臥膝して直に立ち。両袖巻き込み。仕手柱にて常の如く留め拍子踏む。神能の内にも。前後すべて花仕立の能なれば。神々しきのみならず。心おのづから浮き立ち勇み立つ趣あるべし。

敦盛

前ジテ　草苅男
直面　段熨斗目　火口　掛直垂(又は水衣)　腰帯
草を竹に挟みて持つ
ツレ二三人　同行者
すべてシテに同じ
後ジテ　無官大夫敦盛
十六　黒垂　梨子打烏帽子　白鉢巻　中切　法被肩ぬ
腰帯　太刀　扇
ワキ　蓮生法師
角帽子　熨斗目　水衣　掛さし數珠持つ
アヒ　處の者
狂言上下　腰帯　扇

源氏の武者熊谷次郎直實は。平の敦盛を討ちしより人生の無常を感じ。出家して蓮生と名のり。敦盛の菩提を吊はんとて其戦死せし一の谷に至りしに。敦盛の幽霊あらはれて昔語をなし。深く我爲めに念佛して給はる事を謝し。是までは敵なりしも今は誠の恩者なりと喜ぶ心を作れる能なり。修羅物ながらも平家

の公達といひ。殊に年も若木の花武者なれば。雄々しき内にも優美可憐なる心專なるべし。太皺なし。季節は秋。地は播磨。

ワキ出づ

僧ワキ出て丶。「夢の世なれば覺きて。捨つるや現なるらん」の次第を歌ひ。地取にて正面向き。「是は武藏の國の住人。熊谷の次郎直實出家し。蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に懸け申し丶事。餘りに御痛はしく候程に。かやうの姿となりて候。又是より一の谷に下り。敦盛の御菩提を吊らひ申さばやと思ひ候」の名乘あり。道行及び着ゼリフありて。「誠に昔の有樣今のやうに思ひ出てられて候。又あの上野に當つて笛の音の聞え候。此人を相待ち。此あたりの事ども委しく尋ねばやと思ひ候」といひて。笛の音の聞えくる心にて脇座に着き待ち居ると。次第にてシテ及びツレ出づ。刈りたる草の心にて石菖または檜扇の類の葉を竹に狹みおの〳〵かたげて持ちたり。

シテ出づ

ワキと問答す

舞臺に立ち並びて。「草刈笛の聲そへて。〳〵。吹くこそ野風なりけれ」と歌ふ。手には笛をも持たず。又吹く形をもせざれど。ワキ既に聞ゆるといひ。シテこゝにて草刈笛のと歌ひて。笛吹きつれつゝ來れるを知らせたるは。こゝらが能の眞味ぞかし。

それよりサシになり。シテ「かの岡に草刈る男野を分けて。歸るさになる夕ま暮。」ツレも同吟にて「家路もさぞな須磨の海。少しが程の通路に。山に入り浦に出づる。憂き身の業こそ物うけれ。」下歌「問はゞこそ獨わぶとも答へまし。」上歌「須磨の浦。もしほ誰とも知られなば。〳〵。我にも友のあるべきに。餘りになればわび人の。親しきだにも疎くして。住めばとばかり思ふにぞ。憂きに任せて過すなり。〳〵」と。賤が身のわびしさまま。山里のさびしき心など歌ひながら入り替り。ツレは脇座の方へ行きて順に立ち居り。シテは仕手柱に行きて立つと。ワキより「如何に是なる草刈達に尋ね申す

べき事の候」と詞を掛く。シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ」と問ひ返す。ワキ「只今の笛は方々の中にて吹き給ひて候か。」シテ「さん候我等が中に吹きて候。」ワキ「あらやさしや。其身にも應ぜぬわざ。返す〳〵もやさしうこそ候へ。」シテ「其身にも應ぜぬわざと承れども。それ優るをも淚まざれ。劣るをも賤しむなとこそ見えて候へ。其上樵歌牧笛とて。草刈の笛樵の歌は。歌人の詠にも作り置かれて。世に聞えたる笛竹の。不審な爲させ給ひそとよ」などの問答。猶さま〳〵ありて。笛盡しの文句の初同となり。「身のわざの。すける心により竹の」と据拍子踏み。「小枝蟬折さま〳〵に」と右受け。「笛の名は多けれども。草刈の吹く笛ならば是も名は」と正面へ出て開き。「青葉の笛と思し召せ」と。ワキへ向きて敦盛めきたる事をほのめかし。「住吉の汀ならば。高麗笛にやあるべき」と。シテは角へ行き。ツレは順々に入る。「是は須磨の鹽木の。海士の燒きさしと思召せ」

と左へ廻りてワキへ開き。返しにくつろぎ草を後見に渡し。扇もちて仕手柱に出づると。ワキ又詞を掛けて。「不思議やな餘の草刈達は皆々歸り給ふに。御身一人とゞまり給ふ事。何の故にてあるやらん」と問ふ。シテ「何の故とか夕波の。聲を力に來りたり。十念授けおはしませ。」と請ふ。ワキ又「やすき事十念をば授け申すべし。それにつきてもお事は誰そ」と問ふ。こゝに於てシテは「誠は我は敦盛の。ゆかりの者にて候なり」と答へ。ワキは「ゆかりと聞けばなつかしやと。掌を合はせて南無阿彌陀佛」と合掌するを見て。シテもすわり同じく合掌して。「若我成佛十方世界。念佛衆生攝取不捨」と同吟に歌ひ。地になりて。「捨てさせ給ふなよ」と手をおろし。「あら有難や我名をば」と面伏せて立ち。「申さずとても明暮に。向ひて回向し給へる。其名は我といひ捨てゝ」とワキへ開き。「姿も見えず失せにけり」と中入す。

アヒ

アヒ出でゝ名乘座に立ち。

「かやうに候者は。津の國須磨の浦に住居する者にて候。今日は浦へ出て心を慰み申さばやと存ずる。

といひてワキを見。

「やあ是なるお僧は何方より御出て候へば。是には御座候ぞ。

ワキ「是は武藏の國より出でたる僧にて候。御身は此あたりの人にて御座候か。

アヒ「中々此あたりの者にて候。

ワキ「左樣に候はゞ少し尋ね申し度き事の候間。近う來りて給はり候へ。

アヒ「心得申し候。

といひてワキの前にすわり。

「さてお尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ。

ワキ「近頃存じよらざる申事にて候へども。此處において敦盛の果て給ひたる子細。御存じ候はゞ御物語候へ。

アヒ「是は思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。さりながらかつて存ぜぬと申すもいかゞなれば。存じたる通り御物語申さうずるにて候。

ワキ「やがて語られ候へ。

とアヒは正面に向ひ。

「さるほどに平家は寿永二年の秋の頃。木曾左馬頭義仲に都を落され給ひ。此處に御座をかまへ。生田の森一の谷の間を。大勢を率てかためられ。用心きびしくなさるれども。平家の人々は。歌連歌ばかりに心を慰むれ給ひ候。又東國の源氏は。狩すなどり弓矢ばかりに揉まれ給ふ故にや。六萬餘騎を二手に分け。大手からめてよりおしよせ。さうなう打ち破り給ひ御一門の人々も討ち取り。あるひは生捕などにせられしかば。殘る御一門の人々もお舟に召され。四國西國に落ち給ふ。其中に取ても。無官の太夫敦盛は。同じくお舟召されんとて。

渚へ打ちて出で給ふ處に。武藏の國住人。熊谷次郎眞實。よき敵ぞと目をかけ。それへ落させ給ふは。平家の御一門と見えてあり。御返しあれと申して。扇を開いて招きければ。招かれて取つてかへし。波打ち際にてむづと組み。馬より下にどうと落ち給ふが。熊谷は古き剛の者なれば。安々と取つておさへ。痛はしながら御首を討ち落し。御死骸を見てあれば。錦の袋に入れられたる。笛をさゝれ候程に。之を大將の御見參に入れければ。見る人毎に涙を流したるよし承る。誠や其熊谷は。發心の起して。敦盛の御菩提を吊らふと申すが。是は誠しからず候と申す事にて候。其子細は。發心の起す心ならば。其時助け申さうずるが。助けぬ程の者にて候間。よも發心は起し申すまじいと申す事にて候。譬如何やうなる姿にてもあれ。其熊谷が此處へ來れかし。打ち殺して敦盛の。孝養に致し度と申す事にて候。

といひてワキの方に向ひ。

「さて只今の御尋ね如何さま不審に存じ候。ワキ「懇に御物語祝着申し候。是こそ古への熊谷出家し蓮生と申す法師にて候。敦盛の御菩提を吊ひ申さんため。是まで參りて候よ。アヒ「さては古への。熊谷殿にてましますか。さやうの御方とも存ぜず。聊爾なる事を申し迷惑に存じ候。誠に惡に強き者は。善にも強いと申すが。疑ひもなき御身の事にて候。さやうの御志を。敦盛も一しほ受け悦び給はんと存じ候。いよ〳〵懇に御吊あれかしと存候。ワキ「我等もさやうに存じ候間。暫らく逗留いたし。敦盛の御跡を懇に吊らひ申さうずるにて候。アヒ「御逗留にて候はゞ。重ねて御用仰せられ候へ。ワキ「頼み申候。アヒ「心得申し候。

後ジテ出

といひてアヒは入る。

ワキの待謠すみて一聲になり。後ジテ出て舞臺に入りて。「淡路潟通ふ千鳥の聲きけば。寢覺も須磨の關守は誰ぞ」と正面にて歌ひ。「如何に蓮生。敦盛こそ參りて候へ」とワキへ向きて歌ふ。それより掛合いろ〳〵ありて。ワキ「日頃は敵。」シテ「今は又。」ワキ「誠に法の。」シテ「友なりけり」と詰足し。地になりて「是かや惡人の友をふりすてゝ。惡人の敵を招けとは。御身の事かありがたや」と。ワキの前にゆき左の袖かへしてワキを見。「ありがたし〳〵。とても懺悔の物語。夜すがらいざや申さん」と左廻りワキへ開き。返しに眞ン中へ行きて床几にかゝり。クリとなりサシとなる。

クセ

クセになりて立ち。「誠に一昔の。過ぐるは夢の內なれや」と拍子一つふみ。「滿永の秋の葉の。四方の嵐にさそはれ。」と正面へ行きかゝり。「散々になる一葉の。」とさし廻し。「舟に浮き波に臥して。夢にだ

能のしなり　五の卷

にも歸らず」と。左右打込して開き。「籠鳥の雲を戀ひ。歸雁蓮を亂るなり」と角とり。「空定めなき旅衣」と空をながむる心にて上を見。「日も重なりて年月の。立ち歸る春の頃」と廻り。「此一の谷に籠りて」と正面開き。「暫しはこゝに須磨の浦」と。左右して上扇となる。シテ「うしろの山風吹き落ちて。」地「野もさえかへる海際に。舟の夜となく昼となき」と例の如く開き。大左右ありて「千鳥の聲も我袖も」と正面へ出て左の袖卷き込み。「波にしをるゝ磯枕と」と。卷きたる袖を枕の心にしてすわり面曇らし。「海士の苫屋に共寐して」と。立ちて仕手柱の方へ行き。「立つるや夕煙。柴といふ物折りしきて」と扇を柴の心にて。ハテ扇しながら前へ出だし見て。角へゆき右に逆に取りたる扇にてかざし廻りて。「須磨人になりはつる。一門の果てぞ悲しき」と左右しリキへ向ひて留むる。是より立ち歸り其代のさまを語る心にて。「さてもきさらぎ六日の夜

にもなりしかば。親にて候經盛我等をあつめ。今様を歌ひ舞ひ遊びしに」といへば。「さては其夜の御遊びなりけり。城の内にさも面白き笛の音の。寄手の陣まで聞えしは」とワキも思ひ出だして歌ひ。シテ「それこそさしも經盛が。最期まで持ちし笛竹の。」ワキ「音も一節を歌ひ遊ぶ。」シテ「今様朗詠。」ワキ「聲々に。」地「拍子をそろへ聲を上げ」と懷舊の情に堪へぬ心にて。今も昔のまゝの舞と舞ふ。破掛にて五段にも三段にもする事あり。二段の舞といふをも見たる事あり。其時は前ジテ草をかたげずして。籠に秋の草花をさしたるを背負ひ。ツレは負柴に野菊など折りそへたるを。背負ひて出てたり。「さる程に御舟を始めて」と舞ひ上りになり。「一門皆々舟に浮めば」と三拍子ふみ乘りおくれじと汀に打ちよればとさして右へ廻り「御座舟も兵船も」と。橋掛の方を海上の心にてきつと見渡し。遙かに乘り給ふと正面先に出て雲の扇して開く。遠くながめやりたる心な

り。シテ「せんかた波に駒をひかへ。あきれはてたる有様なり」と御座船を追はんとして及ばず。駒を波間に漂はせつゝ途方にくれたるけしきにてイウケン扇をなす。イウケンは心中の煩悶を示す心なり。

「かゝりける處にうしろより。熊谷の次郎直實のがさじと追つかけたり」と。脇座の方より仕手柱の方へ追ひかくる形をなし。「敦盛も馬ひきかへし」と両手にて手綱とる形をなして左へ廻り。「波の打物抜いて」と扇すてゝ太刀をもち「二打二打は打つぞと見えしが」と太刀にて切りつけ拍子ふみ。「馬の上にて引つ組んで。波打際に落ち重なつて」と両手組み合はせそりがへりしてすわり。「遂に打たれて失せし身の」とワキを見。又恨めしき心いでゝ。「敵は是ぞと打たんとするに」と太刀を上げてワキへ向ひしが。「仇をば恩にて。法師の念佛して弔はるれば」と後へ下りて臥膝し。「遂には共に生るべき。同じ蓮の蓮生法師。敵にてはなかりけり」とワキへ向ひさとりたる心にて太刀を捨て。跡弔らひてたび給へと合掌し。袖かへして例の如く留むる。秋風ふき去つて波の音なほ殘る心地ぞせらるゝ。

井筒

作物　井筒　源融

前ジテ　處の女　若女小面の類　葛帶　唐織着流　數珠木の葉持つ

後ジテ　紀有常の息女　前の面に冠老懸　落　腰卷　長組　腰帶　扇

ツキ　旅僧　角帽子　喫斗目　水衣　腰帶　扇さし數珠もつ

アヒ　處の者　狂言上下　腰帶　扇

在原業平の童なりし頃。隣家に住みし女の子と親しみて。或時は門の前なる井筒に立ち寄り。二人互に我影を水鏡にうつしなどして遊びしが。其女の妄執幽霊となりて猶其井筒のほとりに顯はれ。旅僧に對して昔語をする事を。伊勢物語によりて作れる能なり。三番目物にて。位靜に姿美しきを旨とす。太鼓なし。

季節は秋。地は大和。

囃子方座に着くと井筒の一方に薄つけたる作物を正面先に出だす。

作物出づ

ワキ出づ

ワキ出て、諸國一見の僧なるよしを名乘り。此程南都七堂に參りたるが。是より初瀬に參らんとするよしを述べて。其道中なる事を示し。「是なる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候」といひて舞臺の眞ン中へ行き。立ちながら作物を見て。「さては此在原寺は。古へ業平紀有常の息女。夫婦住み給ひし石上なるべし。風吹けば沖つ白波立田山と詠じけんも此處にての事なるべし」といひて。二人の妹脊を吊はんとの下歌あり。

シテ出づ

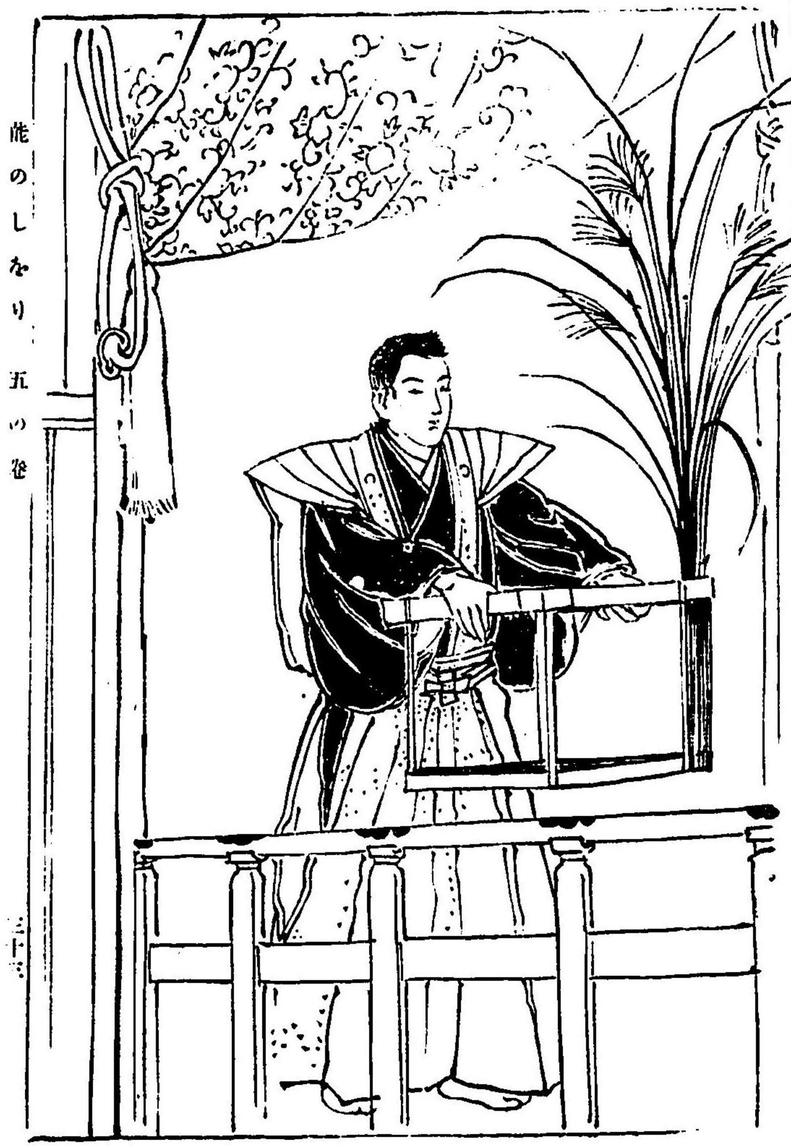
脇座へ座着く。

次第にてシテ女出づ。木の葉と數珠とを左右の手に持ちたり。又流儀によりては水桶を持つもあり。シテの文句に花水を手向けといふ事あり。木の葉は樒にして花の心をあらはし。水桶は水を手向くる心にて何れも理りなきにあらず。

舞臺に入る

さて靜に舞臺に入り。仕手柱先より斜に大小の方へ向ひ。「曉ごとの閼伽の水。〳〵。月も心や澄ますらん」と次第の文句を歌ひ。地取の間に正面直し。「さなきだに物のさびしき秋の夜の。人目まれなる古寺の。庭の秋風ふけすぎて。月も傾く軒端の草」云々と。謠さま〳〵ありて。上歌のトメ。「松の聲のみ聞ゆれども。風は何くとも。定めなき世の夢心。何の音にか覺めてまし。〳〵」と。正面先へ出て。木の葉を下に置き下に居て合掌し。立ちて仕手柱へくつろぐと。

ワキ「我此寺に休らひ。心を澄ます折節。いとなまめける女性。庭の板井を結び上げ花水とし。是なる塚に回向のけしき見え給ふは。如何なる人にてましますぞ」と問ふ。シテ「是は此あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業平は。世に名を留めし人なり。されば其跡のしるしも是なる塚の陰やらん。童も委しくは知らず候へども。花水を手向け御跡を吊ひまゐらせ候」と答ふ。掛合かず〳〵ありて後。シテ「主こそ遠く業平の。」ワキ「跡は殘りてさすがに未だ。」シテ「聞えは朽ちぬ世語りを。」ワキ「語れば今も。」シテ「昔男の」と。それより初同になりて。「名ばかりは。在原寺の跡ふりて。〳〵。松も老いたる塚の草。是こそそれよ亡き跡の」と。少し正面へ出て。「一村薄の穂に出づるは。いつの名殘なるらん」と。作物の薄を見上げ。「草茫々として」と下の方を見。「露しん〳〵と古塚の」と前に拜みたる處を見。「まことなるかな古の。跡なつかしきけしきかな。〳〵」と。



居グセ

跡へたら〳〵と下りて前の處を見る。心を殘すさまなり。
クリになりて眞ン中へ行き下に居てサシを歌ひ續きてクセとなる。
居グセにして何の所作もなく書くべき處もなけれど、此間にシテの昔語をする趣に作れる能なれば。井筒一番の眼目なる文字は此クリサシクセの内にあり。その要を摘めば。昔在原の業平は此石の上の里に年久しく住みたる事ありしが。其頃は紀の有常の娘と契を深くこめたりしに。又河内の國高安の里にも懇にする女ありて通ひ居けるが。もとの女は決して妬む心なく。ある夜も立田越といふさびしき山道を行くを氣遣ひて。風吹けば沖つ白波立田山。夜半にや君が獨り行くらん」と口ずさみしより。夫も其心に感じて。高安の方なるは疎遠になりしといふ物語をなすを一段として。「げに情知るうたかたの。あはれを述べしも理りなり」と結びて打切となし。クセは又その幼かりし時の物語にて。隣同士にて住みける男女の童友だち。門前の井筒によりて互に其影を水に移しあひては遊びしが。今は二人とも年頃にたて睦び親しむも耻かしき程になりしかば。男の一方より。筒井筒ゐづゝにけしまろがたけ。生ひにけらしな妹見ざる間にと。互に井筒によりかゝりたるおのが身の丈も今は生長しつらんと思ふを。長くも御身に逢はざるかなといふ心をよみて贈りしに。女よりも返歌あり。くらべこし振分髪も肩すぎぬ。君ならずして誰か上ぐべきと。童にて垂らしゐたりし髪も肩より下になるほど伸びたり。君より外に之を上げて結び給はるべき夫は侍らずとの意を寄せなどして。互に井筒の歌よみかはしたる故に。井筒の女と言ひ傳へられたるも此有常の娘の幼かりし日の事なるべしと語りて。クセを終へたり。

ロンギ

それよりロンギになりて。シテ「紀の有常が娘とも。」地「又は井筒の女とも。」シテ「耻かしながら我なりと」と名乗り。地「いふや注連縄

の長き世を」と立ちて仕手柱にくつろぎ。「ちぎりし年は筒井筒」と正面先へ少し出て。「井筒の陰にかくれけり」と下りて井筒を見。返しに中入す。

アヒ出でゝ。

「かやうに候者は。和州櫟の本に住居仕る者にて候。それがし此程宿願の子細あつて。在原寺へ七日の日参仕り候。今日も参らばやと存ずる。はやかう参り申して候。

といひてワキを見つけ。

「やあ是なるお僧は。此あたりにては見なれ申さぬ御方にて候が。何方より御出で候へば是には御座候ぞ。ワキ「是は諸國一見の僧にて候。御身は此あたりの人にて御座候か。アヒ「中々此あたりの者にて候。ワキ「左様に候はゞ少し尋ねたき事の候間。近う寄りて給はり候へ。アヒ「心得申して候。

といひて眞ン中に行きワキに向ひてすわると。

ワキ「さて近頃存じよらざる申事にて候へども。紀の有常の息女の事又在原の業平の子細。御存じに於ては御物語候へ。アヒ「是は思ひもよらぬ事を仰せられ候物かな。我等も此あたりに住居仕り候へども。さやうの事懇には存ぜず候。さりながら御尋ねにて候を。かつて存ぜぬと申すもいかゞなれば。凡そ承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。

是より正面に向きて物がたる。

さる程に。在原の業平と申すは。古へ此處に御座ありたると承り候。其頃此あたりに。紀の有常の幼なき息女の御座ありたるが。此かた〳〵未だ幼少の時よりも。業平ともなひあれなる井筒に立ち寄り。互に影をうつし御覽じて御遊ありたるが。おとなしくなり給へば互に恥かはしく思召し。出で逢ひ

給ふ事もなかりたると申す。然る所に業平の方より歌をよみ。息女の方へ遣されたると申す。其御歌は。筒井筒ゐづゝにかけしまろがたけ。おひにけらしな妹見ざるまにと。かやうによみ遣はされければ。又息女の御返歌に。くらべこし振分髪もかた過ぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。互に返歌のありて程なく夫婦のかたらひをなし給ひ。御契あさからず御座候處に。其頃又業平は。河内の國高安と申す所に。とある女と御契りなされ。をり〳〵高安通ひなされたると申す。然れども息女は。嫉む心少しもなく。高安通ひの折々は。いつよりも一段きげんよくして出だし立てられし程に。業平思召すは。かやうのふるまひは如何さま不審なり。二心もあるか御覽ぜんとて。河内へ通ひ給ふ體にて。庭の一村薄の陰にかくれ。内のやうだい御覽あるに。息女は花をつみ香をもり。樒に出て高安の方をながめて。一首の歌に。風ふけば沖の白波龍田山。夜半にや君がひとりゆくらんと。かやうによみ給ひて候。此心は盗賊をば白波とやらん申すげに候。誠に龍田山には。かやうの者の御座ある處を。君のひとり通ひ給ふ事。心もとなきとの御事と承りて候。さて業平も息女の二心なき體を御覽じてより。我河内通ひの事あやまりたるとて。それより御とまりありたると承り候。其後業平も息女も。空しくなり給ひてより此寺を立て。御本尊は觀音にて御座あるが。靈現あらたに御座候により。祈りを掛け申す事の。何にてもかなはぬ事はなく候。

といひてソキに向ひ。

さて只今の御尋ね不審に存じ候。

と問へば。

ワキ「懇に御物語祝着申し候。御身以前に女性一人來られ。只今御身の物語の如く紀の有常の息女。業平の事懇に語り其後井筒の陰にて姿を見失ひて候間。除り不審に存じかたく〳〵に尋ぬる事にて候。アヒ「是は奇特なる事を承り候物かな。それは疑ふ處もなき紀の有常の息女顯れ出て給ひ。詞をかはし給ひたると存じ候。左樣に思召し候はゞ暫く御逗留なされ。息女の跡を懇に御弔ひあれかしと存じ候。ワキ「我等もさやうに存じ候。

待謠

後ジテ出づ

こゝにてアヒは引き。ワキは正面に直し待謠となる。

「ふけゆくや。在原寺の夜の月。〳〵。昔を返す衣手に。夢まちそへて假枕。昔の莚に臥しにけり」と歌ひ。シテの出の一聲となる。後ジテは女面ながらも冠に老懸を着け。さながら業平の姿にて出たるは。次の文句にある形見の直衣の心にて。今も戀慕執着の思に堪へぬさまなるべし。靜に舞臺に入りて。「あだなりと名にこそ立てれ櫻花。年に稀なる人も待ちけり。かやうによみしも我なれば。人まつ女ともいはれしなり」と。ワキに向ひ。又正面直して。「われ筒井筒の昔より。眞弓槻弓年を經て。今は亡き世に業平の。形見の直衣身にふれて」と。左の袖出だし見て心持あり。又正面に直し。「耻かしや昔男に移舞」と歌ひ。「雪をめぐらす花の袖」とくつろぎ。序の舞となる。五段が正式なり。

序の舞

ハヤ

「こゝに來て昔ぞかへす在原の」とワキになりて上扇をなし。「寺井にすめる月ぞさやけき。月ぞさやけき」の地に例の左右ありて。「月やあらぬ。春や昔とながめしも。いつの頃ぞや。筒井筒」と。シテ歌ひながら角へゆき。「つゝゐづゝ。井筒に掛けし」と地うたひ。「まろがたけ」とシテ歌ひながらツマミ扇して正面へ詰め。「おひにけらしな」「おひにけるぞや」と開きて。「さながら見々えし昔男の」と角へ

井筒なのぞき見る

扇にて指しゆき。「冠直衣は女とも見えず」と。頭を扇にて教へながら左へ廻り。「男なりけり業平の面影」と井筒の前にゆき。扇にて薄をかきわけ井の中をのぞき見て。「見ればなつかしや」と歌ふ。上手にすれば趣味あふるゝ處なれど。あまり心深からしめんとてのぞき過ぐれば。物など落したるを捜すやうに見ゆべく。輕くちよとのぞきたらんには。形式ばかりの所作と見ゆべく。シテは熟練と工夫とを要せざるべからず。それより「我ながらなつかしや」と少し下りて打ちしをり。「亡婦魄靈の姿は」と直して。「しぼめる花の色なうて」と長絹の左の袖卷き。しを〳〵と力衰へたる心にて下に居。「在原の寺の鐘も」と靜に立ち耳を傾けて明方の鐘を聞き。「明くれば古寺の」と脇柱の上を見て東の空の白む心を思はせ。「松風や芭蕉葉の」夢も破れて覺めにけり」と。さして乘り込み。正面へ開き。袖返しながら脇正面へ斜に詰めて。返しに拍子二つ踏み留むる。大皺の留頭に

て袖直し扇たゝみ。しづ〳〵と橋掛を入る間も。なほ見物人の耳には。松風や芭蕉葉の文句こそ殘り居るなれ。

「冠直衣は女とも見えず」と左へまはりて井筒の前へ行き。左の袖を右の手にておさへ下居て。「男なりけり」とのぞき。亡婦魄靈」と立ちて跡へ下り。「しぼめる花の」と。扇に左の手そへて下に居面伏する形もあり。

雲雀山

作物　庵

シテ　乳母侍從

深井　葛　葛帶　箔　唐織着流し　扇

後は扇ぬき扇帽中し作花の折枝か持つ

子方　中將姫

葛　葛帶　唐織着流し

男　従者

直垂上下　扇

ソキ　右大臣豊成

風折烏帽子　厚板　大口　長絹　腰帯　扇

トモ　立衆

直垂上下　一人太刀か持つ

アヒ　狩人三人

狂言上下　脚半　一人は鷹か持ち一人は綱か持ち一人は杖を突く

横佩の右大臣の息女中將姫。さる人の讒言にて雲雀山に捨てられたるを。侍從といふ忠義の乳母ありて。春秋の花を麓の里に持ち行きては賣りつゝ。之を養ひ居たりしに。父の右大臣鷹狩に來り道にて侍從に出てあひ。姫のありかを尋ねしに。始めは隱していはざりしかども。父の故なく讒言を信じたる後悔の眞

實なるを見とめしかば。遂に其かくれがに伴なひ行き。父子打ちつれてめでたく都に歸る事を作れり。狂女物なれども君を思ふ心のあまりに。狂ひつゝ花賣りあるく狂女なれば。ゆくへ知られぬ子を尋ね。戀慕のために妄執をのこす狂女などゝは。心持おのづからかはるべし。太鼓なし。季節は四月。地は大和。

屋を出だす

囃子方座につくと。庵に引廻かけて脇座の處に出だし直に引廻とる。庵には屋根なし。萩にて圍ひ。正面に扉をつけたり。子方之に入りて出づ。

男名のる

素袍男出て仕手柱先にて。「かやうに候者は。奈良の都横佩の右大臣豐成公に仕へ申す者にて候。さても姫君を一人御持ち候を。さる人の讒奏により。大和紀の國の境なる。雲雀山にて失ひ申せとの仰せにて候程に。これまで御供申して候へども。いかにして失ひ申すべきと存じ。柴の庵を結び兎角いたはり申し候。さるほどに侍從と申

シテを呼び出だす

す乳母。春は木々の花を手折り。秋は草花を取て里に出て。往來の人に是を代なし。彼姫君をすごし申し候。けふも侍從をよび出だし。里へ下さばやと存じ候」と述べ。橋掛に行きて幕に向ひ。「いかに申すべき事の候」といひて呼び出だすと。シテ幕を上げさせ少し出でゝ。「何事にて候ぞ」といふ。男「けふも又里へ御出て候へ。」シテ「さらば姫君に御暇を申し里へ御出て候へ。」此問答すみて男は幕に入り。シテは舞臺に入りて作物の前に行き。扉をあげて少し下り下に居。「いかに申すべき事の候。今日も里へ出でゝやがて歸り候べし」といへば。折しも姫は物思ひ居る心にて。「げにや閑窓に煙たえて。春の日いとゞ暮らしがたう」と歌ふを受けて。シテ「弊室に燈きえて。秋の夜なほ長し。家貧にしては親知少なく。賤しき身には故人疎し。親しき身にも疎くなれば。」地にて「よそ人はいかて訪ふべき」と歌ひ。シテはさめ〳〵と打ちしを

して姫君に暇を乞ふ

る。主從の情思ひやられてあはれなり。

中入

ワキ出づ

打切にて正面直し。「さなきだに狹き世に。〳〵。隱れ住む身の山深み。さらば心の有りもせて」と。又打切になりて。「唯道せばき埋草」と姫に向き。「露いつまでの身ならまし」と面曇らす。悲しむ心なり。前のよそ人はいかての處を曇らして。こゝをしをるシテもあり。「かくて煙もたえ〳〵の。光の陰も惜しき間に。よその情を頼まんと」と立ち。「草の扃を引き立てゝ」と庵の戸をしめ。「又里へこそ出てにけれ」と脇正面の方へ二足つめ。返しにて中入す

次第になりてソキ出で。二人の立衆。一人は太刀を持ちて共に舞臺に立ち並び。「傾く峰の雲雀山。〳〵。あがるや雲路なるらん」と歌ひ。地取にワキ正面むきて。「是は横佩の右大臣とは我事なり」の名乗をなし。立衆ともに狩場の樂しみを述べたる謠さま〳〵ありて。庵の右の方にゆき床几にかゝる。

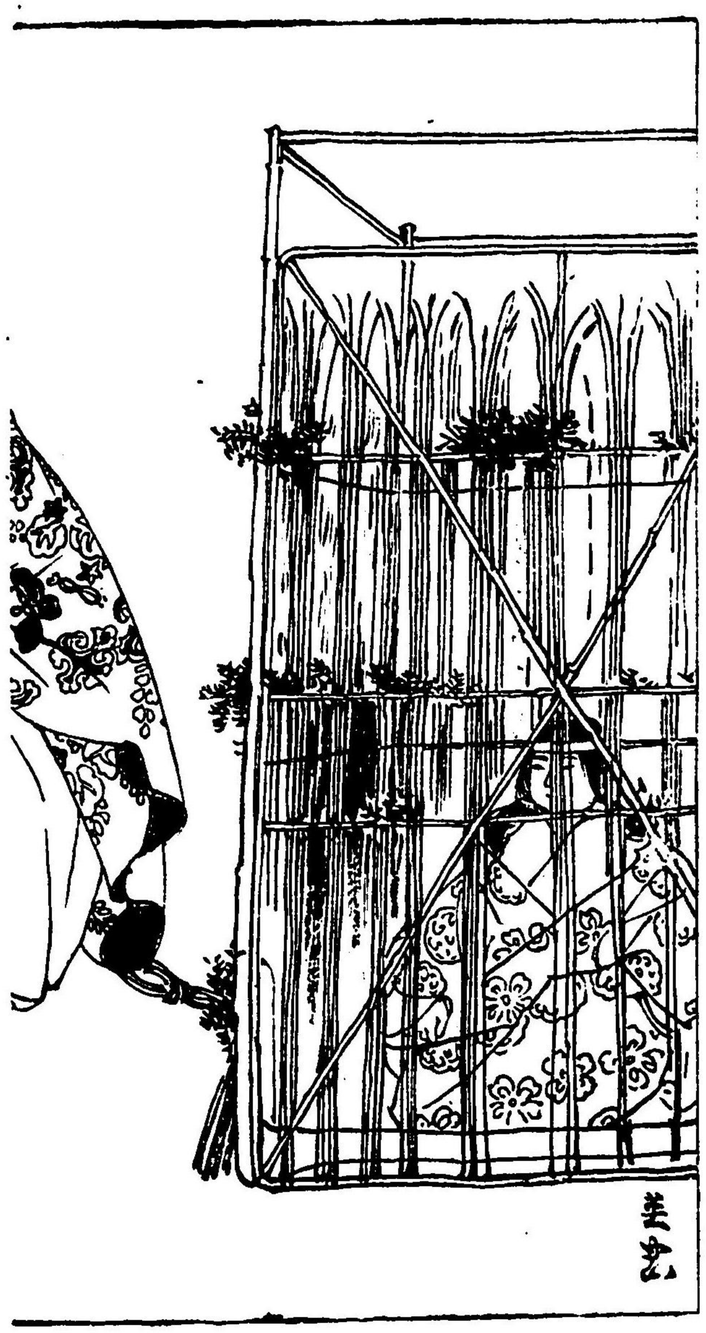
アヒ

狩人に出で立ちたるアヒ三人出づ。オモは鷹をすゑたる心にて。侍烏帽子に房さげたるを手に持ち。次なるは犬を牽きたる心にて綱を持ち。他の一人はセコにて杖を突き　ホウタカ〳〵〳〵〳〵といひて舞臺を一まはりし。犬を放す心にて綱を投げ出だすと。鷹を放す心にて烏帽子を投げ出し。直に取りて皆樂屋に入る。

後ジテ出づ

一聲にて後ジテ出づ。躑躅杜若山吹などの作花を。枝の本のところ紙に包みてかたげ出づるもあり。蘆刈の蘆などの如く竹に挾むもあり。又は花籠に入れて提ぐるもあり。されどかたげ出づるを通例とす。

一の松にて留め。正面むきて「五月まつ花橘の香をかげば。昔の人の袖の香ぞする。」云々と歌ひ。「色ある花を手向けつゝ」とかたげたる花をおろし。「葉末に結ぶ露の御身を。殘しやすると思草」と。舞臺に入り。「いろ〳〵の」と乘込拍子ふみてカケリとなる。狂ふ心なり。カケリは先づ角へ行き。脇座の方へ行き。大小前へ乘り込みて拍子二つ踏み。正面へ乘り込みて拍子一つ踏み。出でゝ開き花をかたげ。角より仕手柱へゆき小廻し花おろして開くカタなり。その留に「頃を得て咲く卯の花の杜若」と歌ひながら乘込拍子ふみ。跡へ下りて「紫染むる山草の」と地の謠にて正面へ行き掛かり指し廻し。シテ「色香にめでゝ花めされ候へ」と手に持つ花を見。脇正面の方へ詰足して賣り歩く心を示し。「月は見ん。月には見えじながらへて」と。開き据拍子ふみて。「浮世をめぐる。影もはづかしの。杜の下草老いにけり。花ながら刈りて賣らうよ」と。出でゝ開き。「日頃へて待つ日は開かず時鳥。にほひ求めて尋ねくる。花橘や召さるゝ」と。角取り廻りて脇正面へ面つかひながら詰め。道行く人に請求するさまなり。



トモと問答す

之を見てトモは立ち。「其花をば何のために持ち給ひて候ぞ」と問ふ。

シテ「さん候これは故ある人に參らせん爲めに持ちて候」と答へ。「何れにも候へ色香にめでゝ召され候へ」と請ひ。正面直して。「花檻前に笑んで聲いまだ開かず。鳥林下に啼いて涙つきがたし。げにも盡きぬは花の種。いろ〳〵なれや紅は。いづれ深百合ふかみ草」と。花を愛し花を褒むる心を獨ごち。「おん心よせに召され候へとよ」と。更にトモに向ひて詰足す。

トモ「げに面白き賣物かな。さて其花を賣る事は。分きて謂れのあるやらん」と問ひ掛くるを。其原因は秘密なれば。「あらむつかしの御尋ねあるや」と語るべからざる心を裏にあらはし。「めされまじくは御心ぞとよ」と不興けに答へて。「いろ〳〵の」より乘拍子ありて。「枝に霜は置くとも」と指し廻して橘の緣を見わたし。「そなたの身には何事も」とソキへ二三足出て。「包む事はなくとも」と右へ廻り。「來し方なれや古をも。忍草を召されよや。忍草をめされよ」と。左の手そへて花をトモの方へ出だし。「あさもよひ」と正面直し。返しに乘拍子ふみて。「紀の關守が梓弓」とくつろぎながら。弓持つ心にて花を左に持ち。「入るさか歸るさか何れにてもましませ」と。さし分けながら右へ廻り花右に持ち直して。「などや花は召されぬぞ。あら花すかずの人々や」と。ワキへ胸ざしゝて進みしが。いまだ買はんともせざれば。「花すかぬ人ぞをかしき」と。不平げに正面直す。「さらば此花を買ひ取り候べし。又御身のこしかたを懇に御物語り候へ」といはれて。花をトモに渡し。「春霞立つを見すてゝ行く雁は」と歌ひながら大小前に行き。正面むき立ちてサシを歌ひ。クセになりて舞ふ。

こし方を語れとシテにいふ

舞クセ

「思へ櫻色に。染めし袂の惜しければ。衣かへうき。今日にぞありける」と拍子一つ踏み。「それのみかいつしかに。春を隔つる杜若」と。正面出て開き。「いつ唐衣はる〳〵の。面影のころかほよ鳥の」と。

右受けて正面へ行きかゝり。「鳴きうつる聲まで」と。梢を見わたす心にて高く指し廻し。「身の上に聞くあはれさよ」と打ちしをる。「かくてぞ花にめて。鳥を羨む人心。思の露も深見草の。茂みの花衣。野を分け山に出て入れども。更に人は白玉の。思は内にあれど。色になどやあらはれぬ」と。角取り廻り。開き左右打込など例の如くして扇開き前に出だし。「さるにても。馴れしまゝにていつしかに」と。上扇して又例の如く。「高間の山の峰つゞき」と。文句に合はせて高くさしまはし。「こゝに紀の路の境なる。雲雀山に隠れ居て」と。右へ廻り仕手柱にて開き。「霞の網に掛かり」と霞の扇して正面へ出て。「目路もなき谷陰の」と開きながら扇逆に持ち。「鶯の草ぐきなら ぬ身の」と乗拍子ふみ。「露に置かれ」と面伏せ。「雨に打たれ」と扇かざして廻り。扇持ち直し左右して留むるもあり。正面むきて「おん身の果ぞ痛はしき」としをるもあり。それより「遠近の」とくつろぎて破掛の中の舞となる。是れ一つは花を買ひ取りたる客に對して愛嬌の心をもあらはし。又一つは物狂に發したる浮れ心の舞とも見つべし。舞の上りに「をちこちの」といふワカありて。「雲雀山にや待ち給ふらん」と正面に詰め。姫を思ひ出てたる心深く。「いざや歸らん。〈」と。庵に歸る心にて橋掛の方へゆくを。ツキは呼び留めて。「やあ如何にお事は乳女の侍從にては無きか。豐成をば見忘れてあるか。さても我姫よしなき者の讒奏により失ひしかども。科なき山を開き後悔すれども叶はず。誠やお事が計らひとして。此雲雀山の谷陰に。柴の庵を結び隠し置きたるとは聞きしかども。誠しからず候處に。今おことを見てこそさてはと思へ。姫は何くにあるぞ包まず申し候へ」といふ。此詞の内にシテは舞臺に歸りツキの前にゆき下に居。「是は仰とも覺えぬ物かな。人のかごとを御用ひありて。失ひ給ひし中將姫の。何しに此世にましますべき」と答へて。

ツキ呼び留むる

「いかに御尋ねありとても」と正面直し。知らぬよしを装ひ。「今は御身も夏草の。茂みにまじる姫百合の。知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん」とワキへ向く。

ワキ先非を悔いシテ姫君のあり処を教ふ

ワキ更に「げに〳〵それはさる事なれども。先非を悔ゆる父の心。涙の色にも見ゆらんものを。はやはや有所を申すべし」といひ。シテ「誠左様に思召すか」と押し。ワキ「中々諸天氏の神も。正に照覽あるべきなり」と誓ひ。シテ「さらばこなたへ御出あれと」と立ちて作物の戸を開き。子方を出だして前にすわらせ。大小前に行きて下に居ると。ワキは脇正面の方にゆき子方と向き合ひて。三人舞臺に三つ鼎の形に座し。「四鳥の時に親と子の。思はず歸り逢ひながら。互に見忘れて。只泣くのみの心かな」と。三人一つにしをる。見る人の袖も共にしをるゝ處なり。「げにや世の中は。定めなきこそ定めなれ」と正面直し。「夢ならば覺めぬ間に。はやとく〳〵と有りしかば」

三人泣く

伴はれ歸る

と。シテはワキに向ひて面下げ告ぐる心を示し。「乳母おん手を引き立てゝ」と。直に立ちて子方を立たせ橋掛に送ると。ワキはシテの裏を通りて子方の跡より入り。シテは「奈良の都の八重櫻」と扇ひらきかざして廻り。「さきかへる道ぞめてたき。〳〵」と開き。例の如く留拍子ふみとむる。心うち晴れめでたきトメなれば開く時イウケンをするシテもありといふ。

歌占

シテ　伊勢の神職

面　白垂　小立烏帽子　厚板　大口　狩衣(又は水衣)肩上　腰帶　弓に短冊つけたるを持つ

子方　幸菊丸

箔　長袴　扇

能のしをり　五の卷

ツレ　男
素袍上下　扇

伊勢の神職の者。諸國を遍歷しつゝ。道にて頓死し。三日目に蘇生せしとて。それがため俄に白髮となりたるが。弓に短冊をつけ。其短冊を人々に引かせて。歌の意味もて吉凶を占なふを業とす。加賀の國まで至りし折しも。故郷なりし一子幸菊丸父のゆくへを尋ねてこゝに來り。父とは知らで歌占を引き。斗らずもめぐりあひ。打ちつれて故郷に歸る事を作れり。此頓死せし間に。地獄のありさまを委しく見たりしとて。之を所作にあらはして物語る事。サシよりクセまでにあり。能としては眼目として見るべき處なり。太鼓なし。季節は五月。地は加賀。

子方ツレ出づ

子方を先にしてツレ出て。舞臺にて向き合ひ次第を歌ひ。「かやうに候ものは。加賀の國白山の麓に住居する者にて候。さても此程いづくの者とも知らぬ男神子の來り候が。小弓に短冊を附け歌占を引き候が。けしからず正しきよしを申し候程に。今日罷り出占を引かばやと存じ候」といひて子方に向ひ。「いかに渡り候か。歌占の御所望にて候はゞ御供申さうずるにて候」といひて。子方は脇座に。ツレ其次に下に居る。

ツレ出づ

一聲にてシテ出て。一の松にて「神心。種とこそなれ歌占の」と歌ひ出だして。伊弉諾伊弉冊の二神に和歌の始まれる謂れを述べ。「占問はせ給へや。歌占問はせ給へや」と。右の方受けて道行く人々に占を勸め。「神風や。伊勢の濱荻」と直して。「引けば引かるゝ梓弓」と舞臺に入り。「伊勢や日向の事も問ひ給へ。日向の事も問ひ給へ」と。仕手柱にて留むる。小弓の弦に白紙の短冊を五枚結び下げたるをかたげたり。シテ若ければ尉面を掛け。老人の時は直面にて白垂のみ用ふる事もありといふ。

ツレより問ひ掛く

ツレはシテを見て。何くの人ぞ若き人なるに何とて白髪とはなりたるぞなど問ひ。シテは「是は伊勢の國二見の浦の神職なるが。われ一見のために國々をめぐる。ある時にはかに頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。是も神の御咎と存じ候程に。當年中に歸國すべきと怠りを申して候」と答へ。ツレさらば歌占を引かんといひ。シテ一番に手に當りたる短冊の歌を讀み給へ考へて參らせんといふ。是よりシテは眞ン中にゆき床儿に掛かり。弓の弦の方を上にして前に出だし持ち居ると。ツレはシテの左の方に下居て一番端の短冊を手に持ち。「教に任せ短冊を取り上げ見れば。何々北は黄に。南は青く東白。西くれなゐの染色の山。かやうに見えて候」といへば。シテ「須彌山をよみたる歌にて候。是は父の事を御尋ね候な」と答へ。更に長々と解釋して後。「二度こゝに蘇生の壽命の。種となるべき歌占の言葉。頼もしく思召され候へ」

ツレ歌占を引く

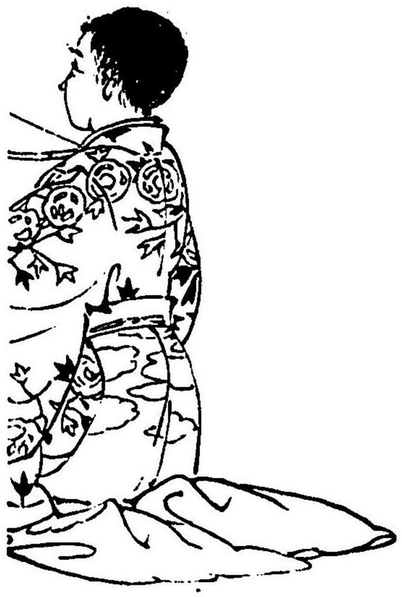
子方又引く

と判斷す。

ツレ座に歸りて子方すゝみ。同じやうに下に居て次なる短冊を手に持ち。「鶯のかひこの中の時鳥。しやが父に似てしやが父に似ず」と讀み上ぐれば。シテ「是も父の事を御尋ね候な。」子方「さん候父を失ひて尋ね申し候。」シテ「是は逢ひたる占にて候物を。」子方「いや逢はねばこそ尋ね申し候へ。」シテ「さりとては占に僞りよもあらじ。鶯に逢ふ言葉の緣あり。又かひこの中の時鳥ともいへり。時も卯月程時もあひにあひたり」といふ折しも。一聲雲に名のりたる心にて。「や」と聞きつけ。目附柱の方を見上げて。「今鳴くは時鳥にて候か」といへば。子方は「さん候時鳥にて候」と答へ。シテ「おもしろし〳〵。當面喉舌の囀。鶯の子は子なりけり子なりけり」と口ずさみたるが。ふと心づきて「不思議や御身は何くの人ぞ」と子方に問ふ。子方「伊勢の國の者」と答ふ。シテ「在所は。」子方「二見の浦。」シテ「父の名字

父子名のりあふ

は。」子方「二見の太夫度會の何がし。」シテ「其父は。」子方「別れて今年八箇年。」シテ「さてお事の幼名は。」子方「幸菊丸と申すなり。」シテ「こはそも神の引合か。是こそ父の何がしよ。」子方「不思議や父にてましますかと。いはんとすれば白髮の。」シテ「身は白雪の面忘れ。」子方「されども見れば我父の。」シテ「子は子なりけり。」子方「ほとゝぎすの」としッかりと聞きて弓を捨て。地になりて立ち。「程經て今



ぞめぐりあふ。占も合ひたり親と子の」と。シテは手を廣げて子方の前にゆき。抱きかゝゆる心にて下に居「二見の占形の。正しき親

子なりけるぞ」と二人共に泣く。嬉しさ胸に溢るゝ心なり。「げにや君が住む」と泣きたる手をおろし。「ふたゝび逢ふぞ不思議なる」と又打ちしをる。

地獄の一曲を所望す

ツレは之を見て近頃めてたき事なりと述べ。「又人の申され候は。地獄の有樣を曲舞に作りて御歌ひあるよし承り及びて候。とてもの事に歌うて御聞かせ候へ」といふと。シテ「やすき御事にて候へども。此一曲を狂言すれば。神氣が添うて現なくなり候へども。よし〳〵歸國の事なれば。めん〳〵名殘の一曲に。うつゝなき有樣見え申さん」と答へて。「月の夕べの浮雲は。〳〵。後の世の迷なるべし」と地の次第になり。地取の間にくつろぎて狩衣（又は水衣）の肩おろし扇持つ。子方も此時はじめの座にかへる。

シテ床几にかゝる

シテはクリを歌ひながら眞ン中にゆきて床几にかゝり。「指を折つて故人を數ふれば。親疎おほく隱れぬ」と。左の指にて數ふる形など

舞グセ

ありてクセとなり。「時うつり事去りて。今なんぞ渺茫たらんや」と立ち。「人とゞまり我ゆく。誰か又常ならん」と。開き左右す。是よりクセの舞にて地獄の有樣を見する心なり。

「三界無安猶如火宅」と上扇して大左右打込例の如く。「死に苦しみを受け重ね。業に悲しみ猶そふる」と。行き掛かり胸さしゝて開き。「嶄碓地獄の苦しみは。春擣にて身を切ること。千斷して血猥籍たり」と。右へ廻りて正面へ行きかゝり。さしまはして血猥籍たる有樣を見わたし。「一日の其うちに。萬死萬生たり」と。乘拍子ふみて。「劍樹地獄の苦しみは。手に劍の木を攀どれば」と。扇左に持ちかへながら下り。「百節零落す。足に刀山蹈む時は。劍樹ともに解すとかや」と。角へゆき刀山を蹈む心にて乘込拍子ふみ。「石割地獄の苦しみは。兩崖の大石もろ〳〵の罪人を碎く」と。右へ廻り正面へ出て。下りながら碎くの文字に當て打合二つして。「灰の火熾地獄は。

頭に火餤を載けば。百節の骨頭より。炎々たる火を出だす」と。扇にて頭上の火焔を指し。扇右に取り直して。炎々たるとイウケン二つ爲し。「ある時は焦熱大焦熱の焔に咽び。ある時は紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ」と。角にて扇卷き込み焔に咽ぶ心を示し。小まはりし正面へ片膝つきて氷に閉ぢられたる樣を學び。「鐵杖頭を碎き。火燥あなうらを燒く」と。左右して二度目の上となり。シテ「飢ゑては鐵丸を呑み。」地「渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり。餓鬼のくるしみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも。我等にいかでまさるべき」と常式の形ありて。「身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて」と行きかゝり。「かやうに苦をば受くるなり」と胸ざしゝて語る心を見せ。「月の夕べの浮雲は」と抱扇して脇正面の方に月を見上げ。「後の世の迷なるべし」と左右し。ツレへ向ひて舞ひ留むる。

カケリ

キリ

是より神氣つきて狂ふさまを見せ。「後の世の暗をば何と照らすらん」と開き。「胸の鏡よ心濁すな〳〵」と左右打込ありてカケリとなる。角とりて廻り。地謠座の前より橋掛にゆき一の松にて舞臺の方を見。「あら悲しや只今まゐりて候に。是程はなどや御責めあるぞ。あら悲しや〳〵」と歌ふ。カケリには緩急ありて此謠になる運び。おもしろき處なれど。口傳などのあるべきを。其家のものならずして猥に語らんも。天機を漏らすの恐あれば委しくは記さじ。ツレ「ふしぎやな彼人の神氣とて。面色かはりさもうつゝなき其有樣。」シテ「五躰さながら苦しめて。」ツレ「白髮は亂れ逆髮の。」シテ「雪を散らせる如くにて。」この謠の間にシテは舞臺に入り。ツレ「天に叫び」と歌ふ內にシテ正面へ出て。シテ「地に倒れて」と歌ひながら〳〵と下りてどうと安座し。直に立つて。「神風の一揉もんで。〳〵」と長拍子ふみ。「時しも卯の花くだしの」とさして角へゆき。「五月雨

も降るやとばかり」とかざして面つかひ。「面には白汗を流して」と左へ廻り。「袂には露の繁玉」と扇にて左の袖を受けて出て。「時ならぬ紋玉ちる足蹈は」と刻拍子ふみ。「とう〳〵と手の舞ひ笏拍子打つ音は」と。兩イウケンして下り。扇と左の手と合はせて手にては笏拍子打つ形をなし。足にては拍子ふみて其音を學び。「窓の雨のふるひわないき。立つゝ居つ肝膽を碎き。神の怠り申しあぐると見えつるが」と。正面より下り臥膝して廻り。神に謝罪する心にて兩手つき。「神は上らせ給ひぬとて」と扇高く上げて。身に附きゐ給ひし神靈の天上に歸り給ひし事を示し。「茫々と狂ひ覺めて」と立ち。是より正氣にかへりたる心にて。「いざや我子よ打ちつれて。思ふ伊勢路の故郷に。又も歸りなば二見の浦」と。子方のそばへ行きて子方を立たせ。あとへ下りて子方へ指すと。子方は橋掛へゆき。シテは脇座の前より仕手柱へ乘り込みて。正面開き。右受け詰足し。「伊勢の國へぞ歸りける」と留拍子ふむ。ツレは跡より入るなり。

小督

作物　片折戸門柴垣

シテ　彈正大弼仲國
直面　小立烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帶
小サ刀　扇
後は狩衣の肩上げ文懷中し鞭持つ
ツレ　小督局
小面　葛　葛帶　唐織狩流し　扇
トモ　侍女
ツレ女面　他はシテに同じ
ワキ　勅使
能のしゝり　五の卷

風折烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帯　扇　文

・アヒ　里の女

びなんかづら　箔若流し

仲國高倉天皇の内勅を奉じ。明月の夜に鞭を揚げて嵯峨野の方なる小督局のゆくへを尋ね。ひかへて御書を傳へて御返事を持ち歸る事を作れる能なり。太鼓なし。季節は仲秋。地は山城。

ワキ出て丶名乘あり。是は高倉の院に仕へ奉る臣下なるが。急ぎ彈正の大弼仲國を召して。小督局の御ゆくへを尋ねさせよとの宣旨に任せ。只今仲國が私宅へと急ぐよしを述べ、橋掛にゆき幕に向ひて。

ワキ名のる

「いかに仲國の渡り候か」と呼び出だす。幕あがりて「誰にて渡り候ぞ」とシテ出て來る。ワキ「是は宣旨にて候」といふを聞き。シテ下に居て兩手をつき頭を下ぐ。ワキ「さても小督局の御ゆくへ。嵯峨野の方に御座候よし聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ尋ね出て此御書を

シテ出づ

與へよとの宣旨にて候」といひて懷中より取り出だしシテに渡すと。シテは受け取り右に捧げ持ちて。「宣旨畏つて承り候。さて嵯峨にては如何やうなる處とか申し候」と問ふ。ワキ「嵯峨にては只片折戸したる處とか聞し召されて候へ」と答ふ。シテ「左樣の賤が屋には片折戸と申す物の候」といひて正面直し。「今夜は八月十五夜にて候間。翠引き給はぬ事あらじ。小督局の御調をば。よく聞き知りて候間。御心安く思し召せと」とワキに向ひ。兩手つきて「委しく申上げゝ丶ればといふと。ワキ「此よし奏聞申しければ。御感のあまり添くも。寮のお馬を賜はるなり」と。奏聞する心にて。正面へ向ひ兩手突き。面上げてシテへ向く。シテ「時の面目畏つて」と又兩手を突きて御受をなし。「やがて出づるや秋の夜の」と二人共に直し。打切にて立ち。「やがて出づるや秋の夜の。月毛の駒よ心して」と入り替り。ワキは幕に入り。シテは舞臺に入り。「雲井に翔れ時の間も。急ぐ心

甲人　のゆくへかな」と仕手柱にて開き。返しにて中入す。

門の作物か出だす　是より嵯峨の住居の心にて片折戸の作物を出だす。門には割竹にて編みたる扉あり。萩にて作れる袖垣を右に二つ左に三つ添へて立て置く。

ツレ出づ　ツレ、トモ、アヒと出て來り。アヒは狂言柱の下に着座し。ツレは扉を明けて入り脇座の處に下に居ると。トモは跡より扉をしめて入り。ツレの次に下に居る。

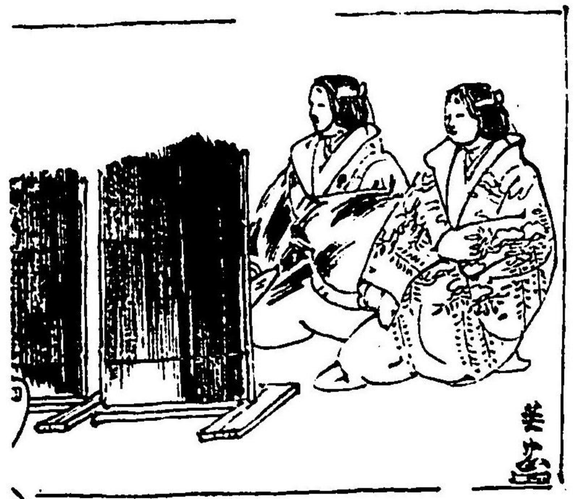
アヒ　アヒ立ちて名乘座に出て。今夜は十五夜にて月のよき事などを獨語し。扉を明けて入り。琴を聞きたきよしをいひ。又扉を明けて出で。もとの座に歸る。

ツレ呼ひく　こゝにツレとトモと同吟の謠ありて地となる。「いざ〳〵さらば琴の音に。立てゝも忍ぶ此思ひ」云々の文句あり。琴を彈くとて所作も樂器も舞臺にては用ふる事なく。文句のみにて其心をあらはしたるこそ能のおもしろみなれ。思はざるべからず。味はざるべからず。

一撃にてシテ出づ　一聲になりてシテ出づ。丸竹の鞭を持ちたるは馬に乘りたる心なり。一の松にて正面むき。「あら面白の折柄やな。三五夜中の新月の色。二千里の外も遠からぬ。叡慮畏こき勅を受けて。心も勇む駒の足並」と駒の頭を見。「夜の歩みぞ心せよ」と直し。「牡鹿なく。此山里とながめける」と右受けて見。「さこそ心も澄みわたる」と直し。「明月に鞭を揚げて」と其形をなし。「駒を早め急がん」と詰足す。「賤が家居の假ながら」と鞭おろしながら歌ひ。「もしやと思ひこゝかしこに。駒をかけよせかけ寄せて。控へ〳〵聞けど。琴引く人はなかりけり」と。左右を見廻しつゝ舞臺に入り。正面開きて駒を控へ聞く心にて耳を傾け。「月にあくがれ出て給ふと法輪に參れば。琴こそ聞え來にけれ」と。大小前へ行き。正面へ開きて又聞き。「峰の嵐か松風か」と橋掛の松を見て指し。「それかあらぬか」と詰め。「尋ぬる人の

駒の後

琴の音か」と門の前へ行きて又聞き。「樂は何ぞと聞きたれば。夫を思ひて戀ふる名の。想夫戀なるぞ嬉しき」と面上げて直す。局のありかを知り得て喜ぶ心なり。右の「をしかなく」あたりよりこゝまて



駒の段と名づけ。仕舞などにてする面白き處なり。

シテ「疑ひもなき小督局の御調にて候。やがて案内を申さうずるにて候」といひてくつろぎ。鞭を後見に渡し。出てゝ門の前へ行き。「いかに此戸明けさせ給へ」といふと。内よりツレ「誰そや門に人音のするは心得て聞き候へ」とトモなる女にいふ。トモ立ちながら「中々に兎角忍ばゝ悪しかりなんと。先づ此扃をおし開く」とて明くるを。シテは「門さゝれては叶ふまじと扃をおさへ」と。左の手にてしかとおさへながら「是は宣旨の御使。仲國是まで參りたり。其よし申し給ふべし」と歌ひて仕手柱まで下る。ツレは「現なやかゝる賤しき賤が屋に。何の宣旨の候べき。門たがへにてましますか」と答ふれども。シテは「いや如何に包ませ給ふとも。人目づゝみもれ出づる。袖の涙の玉琴の。調は隠れなき物を」といひ。ツレ「げに恥かしや仲國は。殿上の御遊の折々は。」シテ「笛仕つれと召し出だされて。」ツレ「馴れし雲井の月もかはらず。」二人「人も訪ひ來て合ひに合ふ。其絲竹の夜の聲。」それより地になりて「密に傳へ申せとの。勅諚をば何とさは。隔て給ふや中垣の。袖が下によしさらば。今宵は片敷の。袖ふれて月に明かさん」と。袖垣のもとに行き。角の方向きて安座し。月を見上ぐる形をなし。上歌の終りに。「あるじはいさ知らず」と門の方を見。「しらめは隠れよもあらじ」と直す。

シテ案内を乞ふ

ツレと問答す

トモは之を見て。仲國おん目にかゝらざらん程は歸るまじきとて霧にしをれて御入り候よしを告げ。「こなたへや入れ參らせ候はん」といへば。ツレも同意して。「さらばこなたへと申し候へ」といひ。トモ立ちて「さらばこなたへ御入り候へ」といふ。シテ「畏つて候」と答へて後見座にくつろぎ。狩衣の肩をおろし扇持ちて出づ。此間に片折戸の作物は引かれ。舞臺はすべて既に室内の心になり居るなり。シテは懐中より御書を出だし扇にのせてツレの前に持ち行き。下に

作物を引く

御書をツレに渡す

置きて跡に下り。「恐れながら直の御返事を給はりて。奏し申し候はん」と下に居て手を突く。ツレは御書を左の手に持ち。「もとよりもかたじけなかりし」云々と歌ひ。「憚の心にも。とふこそ涙なりけれ」とシテに向ひ打ちしをる。

クセの間に御返事の出來たる心にて。前の御書を扇と共にシテの方へ向け出だし置くと。ロンギになり。「是までなりやさらばとて。直のお返事給はり。御暇申し立ち出づる」と。ツレの前に行きて扇と共に持ちもとの座に歸り懐中す。ツレは「思出の名殘ぞと。慕ひて落つる涙かな」としをる。シテは辭儀する。「迎への舟車の」と扇上げて舟車を指す形ありて。「やがてこそ參らめと」とツレに向くと。「いへど名殘の酒宴とて」とトモ扇を開きシテに酌するを。シテも扇開きて受け。「酒宴をなして糸竹の」と歌ひ。「聲すみ渡る月夜かな」と。扇たゝみて立ち。「月夜よし」と歌ひながらくつろぎ。破掛五段

の男舞となる。宴席にて興に乘じたる心なり。

キリは「今は却りて婿しさを。何に包まん唐衣豐かに。袖打ち合はせ御暇申し」と。左の袖を見又右の袖を見て。兩袖合はせ下に居てツレに辭儀をなし。「急ぐ心も勇める駒に」と。目附柱の方に駒の待ち居る心にて見やり。「ゆらりと打ち乘り」と馬に乘る心持にて乘り込み。「歸る姿の跡はるゝ」とツレもトモも立ちて見送り。シテは橋掛に行き三の松にて一つ廻り。「小督は見送り仲國は。都へとてこそ歸りけれ」と開き留拍子踏む。シテの橋掛に來りし時ツレを見かへりたる太夫もあれど。こゝは蟬丸などゝは違ひ。仲國は小督に名殘を殘すべきにあらず。一刻も早く歸り參りて御返事を君に奏せんとの心專なるべければ。何の事もなくすらゝと勇ましく行きて留めんこそ本意なるべけれ。又馬に乘りて後。後見座にて右の袖返し。再び鞭を持ちて鉢の木のやうに馬の首を打ちながら橋掛に行く形も

ありと聞きしかど。二度鞭を持つはくだ〳〵しくて面白からぬ心地す。

頼政

前ジテ　老翁
　朝倉尉　尉髮　獅子目　水衣　腰帶　扇
後ジテ　源三位頼政
　面頼政　頼政頭巾　厚板　法被　半切　腰帶
　太刀　扇
ワキ　旅僧
　角帽子　獅子目　水衣　數珠　扇
アヒ　處の者

高倉の宮に平家討伐の事を勸め參らせ。宇治川の合戰に打ち負けて平等院に討死せし頼政の幽靈あらはれ。其時の有樣を語る事を作れる能なり。修羅物の一つなれど。敎盛田村などゝ違ひ。シテが前後とも老體なれば。輕々しからぬ物とせり。太鼓なし。

季節は五月。地は山城。

ワキ出て名のる

ワキの僧出でゝ。是は諸國一見の僧なるが。此程都にありて寺社殘りなく拜み廻りたれば。是より南都へ參らばやと思ふよしを述べ。道行ありて。「宇治の里にも着きにけり」と歌ひ。眞ン中へ行き正面向きて。「げにや遠國にて聞き及びにし宇治の里。山の姿川の流れ。遠の里橋の景色。見所多き名所かな。あはれ里人の來り候へかし」といひて脇座へ行かんとすると。「なふ〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ」と呼掛にてシテ出で來る。是よりワキは宇治の名所舊跡を問ひ。シ

シテ呼掛にて出づ

初同

テは賤しき里人なれば名所舊跡などは知らぬよしを答へ。ワキ又喜撰法師が住みける庵の事を問ひ。シテ又「尉は知らず候」と答へ。それより槇の島及び橘の小島が崎の問答ありて。ワキ「向ひに見えたる寺は。如何さま惠心の僧都の。御法を說きし寺候な」といふを打ち消して。シテは「なふ〳〵旅人あれ御覽ぜよ」とワキを呼び掛けて。脇柱の方を見上げ。「名にも似ず。月こそ出づれ朝日山」と。出てたる月によりて朝日山を敎へ。「山も川もおぼろ〳〵として」と。右受けて見渡す處に餘情をこめ。「げにや名にしおふ。都に近き宇治の里。聞きしに勝る名所かな」と。左へ廻り正面にて留め。謠切れて此度はシテより。平等院と申す御寺を御覽ぜられたるかと問ふ。不知案内にて未だ見ず候と答ふれば。シテは二三足出て丶是こそ平等院なりと敎へ。是なるは釣殿とて面白き處ぞといひ。ワキの「又これなる芝を見れば。扇の如く取り殘されて候は。何と申したる事

中入

アヒ

にて候ぞ」といふに答へて。「さん候此芝について物語の候語つて聞かせ申し候べし」といひて眞ン中に行き。下に居て頼政戰死の古跡なるよしを物語り。「夢の浮世の中宿の」にて立ち。「我頼政が幽靈と。名乘りもあへず失せにけり」と仕手柱にて開き中入す。此前ジテ杖を突きて出て。中入する時仕手柱にて捨つるをも見たる事あり。是は扇にてするよりは重き形なるべし。

アヒ出でゝ。

「かやうに候者は。此あたりに住居する者にて候。それがし此間は何方へも罷出てず候間。今日は平等院のあたりへ參り。心を慰み申さばやと存じ候。

といひてワキを見つけ。

「やあこれなるお僧は。此あたりにては見なれ申さぬ御方にて候が。何方よりいづくへ御通り候へば。是には御座候ぞ。ワ

キ「是は諸國一見の僧にて候。御身は此あたりの人にて渡り候か。アヒ「中々此あたりの者にて候。ワキ「左樣に候はゞ。少し不審申したき事の候間。近う來りて給はり候へアヒ「畏つて候。といひてワキの前にすわり。

「さてお尋ねありたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ。ワキ「存じょらざる申し事にて候へども。古へ此所にて。源三位頼政の果て給ひたるやうだい。又扇の芝の子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ。アヒ「是は思ひもよらぬ事を御尋ね候物かな。我等も此あたりに住み候へども。さやうの事懇ろには存ぜず候。さりながら御尋ねにて候間。凡そ承り及びたる通り。御物語申さうずるにて候。

と正面向きて語る。

さるほどに。此處にて宮軍のやうだいは。源三位頼政の御謀叛にて。高倉の宮をすゝめ申され。此處にてさま〳〵御合戰ありたると申す。總じて頼政の御謀叛は。伊豆守仲綱の御持ちなされ候御馬を。宗盛御所望なされ候間。御馬を參らせられ候處に。少し延引いたしたりとて。今此馬を上ぐる事滿足二なしとて。仲綱と金やきをして。御廐に立てられしかば。頼政も仲綱も之を口惜しく思し召し。宮の御謀叛の人と直に軍に及び申す處に。頼政の郎等に。競瀧口と申す者。宗盛へ參り。今度頼政宮の御謀叛人と申す事。我等に少しも知らせ申されず候間。心變り仕り。是まで參りて候。あつばれよき馬物の具を給はり。三井寺の先がけ仕りたきよし申されしかば。いしくも申したる競かなとて。なんれうと申す御馬を給はりしかば。瀧口其馬に打ち乘つて。三井寺さしてまいられ候が。粟田口とやらんにて。なんれうの尾髮を切り。昔は

なんれう今は平の宗盛と。金やきをして追ひかへし申されしかば。もとより御馬は名馬なれば。六波羅へかけ戻る。宗盛御覽じて。大に驚き給ひ。瀧口にたばかられし事。無念の次第なり。急ぎ三井寺へ押し寄せらるべきとの御事なるに。又三井寺の衆徒も。心變りあるよし聞し召し。大和路さして落ち給ふ。此宇治と三井寺との間にて。宮はさい〳〵御落馬なされ候間。まづ此處に御座を構へ。橋を取り離して御座候處に。跡より御敵追つかけ奉り。橋を引かれたる事なれば。馬さつと此川へ打ち入り。左右なうこなたの岸へ上り。戰ひ申されしかば。宮方打ち負け給ひ候間。頼政の調議として。宮を南都の方へ落し奉り。其身は跡に殘り。防ぎ戰ひ給へども叶はずして。此處に扇を敷き御腹召されて候。されば名將の果て給ひたる御事なれば。其跟を取り殘し扇の芝と申し習はし候。總じて最前より申す如く。委しき子細は存ぜず候。何と思召し御尋ねにて候ぞ。如何さま不審に存じ候。

とワキへ向ひいふと。

ワキ「尋ね申す處に懇に御物語祝着申し候。尋ね申す事餘の儀にあらず。御身以前に老人來られ。此處の名所など敎へ申されし。其後我頼政の幽靈なるよし申され。忽ち姿を見失ひて候間。餘りに不審に存じ。方々に尋ぬる事にて候よ。アヒ「是は不思議なる事を仰せられ候物かな。さては我等の推量には。疑ふ處もなき頼政の亡心にて御座あらうずると存じ候。

一部にて後ジテ出ヅ

それより例の如く互に挨拶してアヒは引き。ワキは正面直す。ワキの待謠すみて一部となり。後ジテ出で一の松にて。「血は涙鹿の川となつて」と歌ひ。「あら閻浮戀しや」と幕の方を見面伏せ「うたかたの。あはれはかなき世の中に」と舞臺に入り。「蝸牛の角の爭ひ

クセ

も」と乗込拍子踏みて開き。「あら貴との御事や。猶々御經よみ給へ。とワキへ向き。ワキ「あひにあひたり處の名も。」シテ「平等院の庭の面」と脇正面の方を見廻し。ワキ「思ひ入れたり。」シテ「佛在世に」と詰足し。「佛の說きし法の庭」と地になりて据拍子踏み。それより正面へ開き左の袖あしらひワキの前へ行き。袖かへしワキをとくと見て。今は何をか包むべきと歌ひながら左へ廻り。小廻りしてワキへ開く。

「そも〳〵治承の夏の頃」とサシになりて。真ン中へ行き床凡に掛り。クセになりて「數萬騎の兵を。關の東に遣すと。聞くや音羽の山つゞく」と右の方に山をながめ。「こゝぞ浮世の旅心。宇治の川橋打ち渡り」と拍子踏み。「山とりさして急ぎしに」と正面を見。「宇治橋の中の間引き離し」と雲の扇して。「下は白波」と左の下の方を見。「上に立つも」と抱扇して右の上を見。「共に白旗も靡かして」と大きく

能のしなり　五の巻

指し廻し。「寄する敵を待ち居たり」とイウケン扇二つして正面をしつかりと見。勇ましく大軍を待ち受くる心あり。

「かくて平家の大勢。橋は引いたり。水は高し」と上を見上げ。「宇治川の先陣我なりと。名乗りもあへず三百餘騎」と正面を見。「くつばみをそろへ川水に。少しもためらはず群れ居る村鳥の。翼を並ぶる羽音もかくやと白波に」と拍子長く踏み。「ざつ〳〵と打ち入れて」と兩手にて正面へ投げ出だすやうの形をなし。「浮きぬ沈みぬ渡しけり」と又正面を見る。

「忠綱。兵を下知して曰く」と歌ひながら直し。「水の逆まく處をば」と拍子踊み。「岩ありと知るべし」と見廻し。「弱き馬をば下手に立てゝ」と袖かへして左の方を見。「強きに水を防がせよ」と右の方を指す。頼政は宇治の方に居て語る處なれば。川上は左にて川下は右なればなり。「流れん武者には弓弭を取らせ」と扇に左の手を添へて持ち。「互に力を合はすべしと。只一人の下知によつて」と長く拍子踊み。「さばかりの大河なれども。一騎も流れずこなたの岸に。をめいて上れば味方の勢は」と正面の方より見廻し。橋掛の方へ高く見上げ。「我ながら足もためず」と正面へ出て。半町ばかり覺えずしさつて。「切先を揃へて。こゝを最期と戰うたり」と跡へ下り。扇を楯に取り太刀抜きて切りつけ戰ふ形をなす。「さる程に我も〳〵と戰へば」と角取り廻りて仕手柱に立ち。「是までと思ひて」と太刀を捨て。扇右に持ちて「是なる芝の上に」と胸ざしゝて正面の下を見。「扇を打ち敗き」と扇を下へ置くやうにして。「鎧ぬぎすて座を組みて」と安座し。「刀を抜きながら」と扇を刀の心にて出だし見。「埋木の。花咲く事もなかりしに。實のなる果はあはれなりけり」と面伏せ。「跡とひ給へ御僧よ」と袖返し膝立てゝワキを見。それより立ちて左へ廻り。「扇の芝の草の陰に」と扇を角の方へ投げ出だし。「歸るとて失せ

にけり」と右へ廻りて。袖かづき下に居。返しにて立ち留拍子ふむ。
袖かづくは姿の失せたる心を示すなり。

二人靜

前ジテ　靜　　若女　葛　葛帶　落　唐織着流し　扇
後ジテ　前に同じ　　同面　靜烏帽子　長袴　腰帶　扇
ツレ　榮摘女　　女面　葛　葛帶　掛　唐織着流し　下に腰卷　扇
瓶に木の葉入れて左に持つ
物着にて唐織ぬぎ　靜烏帽子　長袴　腰帶　扇
ワキ　勝手の神職

アヒ　神職の下人
狂言上下　扇

三吉野勝手の明神に正月七日の神事あり。此時夏箕川より若榮を摘み來りて手向くる例なれば。女摘みにゆきたるに。誰とも知らぬ女ありて。童が罪業かなしければ一日經書いて吊ひ給はらん事を。社家其他の人々に申し給へと言ひ捨てゝ消え失せたり。あまりの不思議さに急ぎ歸りて此よしを物語り。誠しからねば申さじと思ひたれどもといひ居る處に。彼女の靈また來りて。誠しからずと疑ひたるを恨み。遂に判官殿に仕へ申しゝ靜なりと名のり。靜ならば舞の上手なれば舞をまひて見せ給へと所望せられ。榮摘の女と共に相舞まふ事を作れり。此幽靈は他の能の如く。その物ひとりが姿をあらはしたるにあらずして。

ワキ名のる

菜摘女の身を假り。これに乘り移り居る心なれば。舞臺に二人はあらはるれども。一人は形。一人は影なりと見るべし。太鼓なし。季節は初春。地は大和。

名乘笛にてワキ出て。勝手の御前の神職なるよしを名乘り。今日正月七日の御神事に供ふるがため。夏箕川にて若菜を摘ますべきよしを述べ。アヒを呼びて。とう〳〵女共に夏箕川へ出てよと命ずべきよしをいふと。アヒ畏つて候とて其前を立ち。「いかに菜摘の女。今日は何とて遲く歸り候ぞ。とう〳〵歸り候へ。其分心得候へ〳〵」と

一擊にてツレ出づ

觸れて引く。

シテ呼び掛く

一擊にてツレ出て。仕手柱に立ちて「見渡せば松の葉白き吉野山幾世つもりし雪ならん」と歌ひ。若菜摘む意味の文句いろ〳〵」ありて。「春立つと。いふばかりにや三吉野の。山も霞みて白雪の。消えし跡こそ道となれ。〳〵」と。歌ひ留むると。シテ「なふ〳〵あれなる人に申すべき事の候」と呼掛けて出づ。ツレ「いかなる人にて候ぞ」とシテの方を向く。シテ「三吉野へ御歸り候はゞ言傳申し候はん。」ツレ「何事にて候ぞ。」シテ「三吉野にては社家の人。其外の人々にも言傳申し候。餘りに童が罪業の程悲しく候程に。一日經かいて我跡とひてたび給へと。よく〳〵仰せ候へ。」ツレ「あら恐ろしの事を仰せ候や。言傳をば申すべし。さりながら御名をば誰と申すべきぞ。」シテ「まづ〳〵此よし仰せ候ひて。若しも疑ふ人あらば。其時童お事に附きて。委しく名をば名乘るべし。かまひてよく〳〵屆け給へと」と。シテは橋掛にて。ツレは仕手柱のまゝにて向き合ひ問答し。「夕風迷ふあた雲の。うき水莖の筆の跡。かき消すやうに失せにけり」と。シテは右に廻り開きて中入し。ツレは正面直す。ツレ「かゝる恐しき事こそ候はね。急ぎ歸りて此よしを申さばやと思ひ候」といひてワキの前に行き。眞ン中に下居て。「如何に申し候。

シテ中入す

ツレ歸りて告ぐ

シテの亡霊ツレに附く

只今歸りて候」といへば。ワキ「何とて遲く歸りたるぞ」と問ふ。ツレ「不思議なる事の候ひて遲く歸りて候」と告ぐ。ワキ又「さて如何やうなる事ぞ」と問ふ。ツレ「夏箕川のほとりにて。何くとも なく女の來り候ひて。餘りに罪業の程悲しく候へば。經かいて跡吊ひて給はれと。三吉野の人。取り分き社家の人々に申せとは候ひつれども。誠しからず候程に。申さじとは思へども」と。いひ掛けたるが。俄に靜の亡靈の附きたる心にて。ツレの謠の調子變り。「何誠しからずとや」と前に正氣なりしツレの疑ひたる言葉を咎め。「うたてやなさしも賴みしかひもなく誠しからずとや」と。恨を述べ。「只よそにてこそ三吉野の。花をも雲と思ふべけれ。近く來ぬれば雲と見し。櫻は花に顯はるゝ物を」と。遂に其眞僞の顯はるべきを告ぐ。されどもシテの姿は未だ顯はれずして。ツレの獨言の如く聞ゆれば。ワキは驚き怪しみ。「言語道斷。不思議なる事の候物かな。狂氣して候は如何に」といひて。其附きたる人の名を名乘るべきよしをいへば。ツレは判官殿に仕へ申せし者なりと答ふ。さらば衣川の御最期まで御供したりし十郎權頭かと問へば。「誠は我は女なりしが。此山までは御供申し。こゝにて捨てられ參らせて。堪へぬ思の涙の袖。」地になりて「包ましながら我名をば。靜に申さん恥かしや」と答へ。暗に靜の文字を顯はしたれば。ワキは始めて之を知り。「さては靜御前にてましますかや。靜にて渡り候はゞ。隱れなき舞の上手にてありしかば。舞を舞うて御見せ候へ。跡をば懇ろに弔らひ申し候べし」といひ。ツレは「我若し舞の裝束をば。勝手の御前に納めしなり」といひ。ワキ「さて舞の衣裝は何色ぞ。」ツレ「袴は精好」ツレ「世を秋の野の花づくし」と。委しくいはれてワキは怪しみながら寶藏を開き見たるに。果して其物ありしかば。之を取り出だし渡す心にて。ワキは地謠より出だし置きたる靜烏帽子と長絹とを兩手に持ち。

裝束ス
物着
舞曲となる
後ジテ出づ

ツレの前へ行コて渡すを。ツレは受取りて立ち。後見座にくつろぎて物着となる。

是より舞曲となる心にて立ち。仕手柱に出てゝ。「げに恥かしや我ながら。昔忘れぬ心とて」と歌ひ。ワキ「さもなつかしく思出の」と受け。ツレ「時も來にけり」と歌ひ。ワキ「静の舞」と受け。ツレ「今三吉野の川の名の」と歌ふ時。後ジテは幕上げさせ。「菜摘の女と思ふなよ」と歌ひながら出て來る。烏帽子長絹腰卷着附に至るまで同じ出立なるをよしとせり。かくて「河淀ちかき山隠の。香もなつかしき袂かな」の地の間に。ツレは左の方にゆきて正面むき。シテは舞臺に入りて仕手柱先にツレと並びて開き。二人向き合ひ。「さても義經兒徒に準ぜられ。既に討手向ふと聞えしかば。小船に取り乘り。渡邊神崎より。おし渡らんとせしに。海路心に任せず難風吹いて。もとの地に着きし事。天命かと思へば科なかりしも」と。同

舞ケセ

吟にて歌ひ。地になりて。「科ありけるかと。身を恨むるばかりなり」と打ちしをり。打切ありて舞クセとなる。クセもすべて相舞なり。「さる程に。次第々々に道狹き。御身となりて此山に」と拍子一つ踏み。「處は三吉野の。花に宿かる下臥も」とさしわけして。花の下陰を見わたし。「のどかならざる夜嵐に。寐もせぬ夢と花も散り」と。左右打込して開き。据拍子ありて打切となる。

それより「誠に一榮一落まのあたりなる浮世とて。又この山を落ちてゆく」と。角取り廻り。左右打込して扇ひらき。「むかし清見原の天皇」と二人うたひながら上扇して。「大友の皇子に襲はれて。彼山に踏み迷ひ。雪の木陰を。頼み給ひける櫻木の宮」と。大左右打込例の如く。「神の宮瀧」と正面に瀧を見て。「西河の瀧」と霞の扇をおろしながら。瀧の落つるを前に見おろす心にて出て。「我こそ落ち行け」と右へきりゝと廻り。「落ちても波は返るなり」と。前の瀧見た

る方に胸ざしゝて開き。「さるにても頼む木蔭の花の雪。雨もたまらぬ春の夜の」と。角取り廻り來りて。「月は朧にて」と。抱扇して朧夜の空を見上げ。「猶足引の山深み。分け迷ひゆく有樣は」と。左右して打ち込み。「もろこしの。佐國は花に身を捨てゝ」と歌ひながら開き拍子ふみ。「遊子殘月にゆきしも。今身の上に白雪の」と。定まりの形ありて。「花を踏んでは」と。ツマミ扇して乘り込み。「同じく惜しむ」と右にまはり。「春の夜も靜ならで。騷がしき三吉野」と。拍子ありて。「山風にちる花までも」とさして角へゆき。「追手の聲やらんと」と扇かざして見。「跡をのみ三吉野の。奥ふかく急ぐ山路かな」と。廻りて左右し舞ひ留むる。餘情春風と共に梢に殘るおもむきあり。

「それのみならず憂かりしは。靜は舞の上手なり。とく〳〵と有りしかば」と。ワキに向ひ。「心も解けぬ舞の袖。かへす〳〵も恨めしく。昔戀しき時の和歌」と開き。「しづやしづ」と同吟して相舞の序の舞となる。靜は名立たる舞の上手なれば。優美專一に舞ふべきは勿論なれども。下には別れし義經を慕ふ心ふかく。涙ながらに袖かへしたる心を忘るべからず。「しづやしづ。しづの苧環くりかへし」とワカにて上扇し。「昔を今になすよしもがな」と左右して。「思ひ返せば古も」と。シテはツレの肩へ手を掛け返しに二人とも少し出て。「戀しくもなしうき事の」とシテ拍子踏み。「今も恨の衣川」と跡へ下り。「身こそは沈め」と下に居て。「名をば沈めぬ」と面伏せ。「武士の」と二人向き合ひ。「物事に憂き世の。習ひなればと思ふばかりぞ山櫻」と。シテは脇座へ。ツレは橋掛へさしゆき。「雪にふきなす花の松風」と乘り込み。「靜が跡を吊ひ給へ」と二人同じくワキへ合掌し。返しに留むる事かたのの如し。

序の舞

キリ

熊坂

前ジテ　僧
直面　角帽子　駒斗目着流し　水衣　腰帶　數珠
後ジテ　熊坂長範
長頭巾見　長範頭巾　厚板　半切　法被　長刀
ワキ　旅僧
角帽子　駒斗目　水衣　腰帶　扇　數珠
アヒ　處の者
狂言上下　扇

都の僧東國に趣かんとて赤坂の宿の邊にかゝりたるに。僧體の人呼び掛けて。今日はさる者の命日なれば吊らひて給はれとて。我庵室へ伴ひ行き。みづからの腕立話などして暇を告げ。寢室へ入るかと見る間に。庵室も失せて旅僧ひとり松蔭に殘されし

ワキ出づ

シテ呼び掛けて出づ

が。かの僧は再び熊坂長範の幽靈となつて顯はれ來り。在世の昔。三條の吉次の旅宿に攻め入り。牛若の爲めに討たれたる物語をなす事を作れる能なり。觀世清孝いひたる事あり。今は皆熊坂々々とて若い者どもの輕々しくする能になりたれと。熊坂はそんな小盜賊にあらず。其位こそ大事なれと。太鼓あり。季節は秋。地は美濃。

次第にてワキ出て。仕手柱先より鼓打ちの方へ斜に向き詰めて。「憂しとはいひて捨つる身の。〳〵。ゆくへいつとか定むらん」と歌ひ。低音の地取にて正面向き。名乘すみ。逢坂山を越えて近江の湖水を見つゝ。瀨田の長橋を渡り。遂に赤坂の里近く來りしよしの道行を歌ひ。脇座の方へ行かんとすると。シテ呼び掛けて出て來る。僧體にて珠數を持ちたり。

「なふ〳〵あれなる御僧に申すべき事の候」ときゝて。「こなたの事

にて候か何事にて候ぞ」とワキ向きかへる。シテ「今日はさる者の命日にて候吊らひて給はり候へ。」ワキ「それこそ出家の望みなれ。さりながら誰と志して回向申すべき。」シテ「たとひ其名を申さずとも。あれに見えたる一木の松の。少しこなたの茅原こそ。只今申す古墳なれ」と。橋掛にて右の方を受け見て。「往復ならねば申すなり」とワキへ向き。又ワキと問答しながら舞臺に入り。初同かたの如くすみて。「愚僧が庵室にて一夜を明かして御通り候へ」といはれ。ワキは座に着き。シテも眞ン中に行きてすわる。庵室に伴なはれ行きたる心なり。

ワキもシテも座に着く

ワキは回向を始めんとして。持佛堂に入りて見たるに。佛像はなくて。壁には大長刀など掛けてあるを見たる心にて。シテに向ひ。「何と申したる御事にて候ぞ」と問ふ。シテ答へて。「さん候此僧は未だ初發心の者にて候が。御覽候如く此あたりは。垂井青墓赤坂とて。其里々は多けれども。間々の道すがら。青野が原の草高く。青墓こやすの森茂れば。蜚ともいはず雨のうちには。山賊夜盗のぬす人ら。高荷を落し里通ひの。下女やはしたの者までも。打ち剝ぎ取られ泣き叫ぶ。さやうの時は此僧も。例の長刀ひつさげつゝ。こゝをば慈僧に任せよと。呼ばゝりかくればげには又、一度はさもなき時もあり。さやうの時は此處の。便りにもなる物ぞかしと。喜びあへば然るべしと。思ふばかりの心なり」と語り。「なんぼふあさましき世を捨者の所存候ぞ」などいひて。物語さま〳〵したる後。「かやうの物語申さば夜も明けなまし。お休みあれやお僧達」と。ワキを見込み。「我もまどろまんさらばと」と立ちて。眠藏に入るよと見えつるが。「形も失せて庵室も。草村となりて松蔭に。夜を明かしたる不思議さよ」と中入す。

中入

アヒ出でゝ名乘座に立ち。

アヒ

「かやうに候者は赤坂の在所に住居仕る者にて候。向ひの在所まで用の事にて參り申す。いそぎ參らうと存ずる。

といひてワキを見つけ。

「いや是に見馴れ申さぬ御僧の御座候が。何くより何方へ御通りなされ候ぞ。ワキ「是は諸國一見の僧にて候。少し不審申し度き事の候。かう御通り候へ。アト「畏つて候。

といひてワキの前にゆき下に居て。

「さて御不審なされたきと仰せ候は如何やうなる事にて候ぞ。

ワキ「事ふりたる事にて候へども。古へ此所にて熊坂の長範の強盗ゆゑ果て給ひたる事。御物語あつて給はり候へ。アト「是は思ひもよらぬ事を御尋ね候物かな。我等もさやうの事を委しくは存じもいたさねども。聞き及びたる通り御物語申さうずるにて候。

といひて正面むき語となる。

「さる程に熊坂の長範の強盗のやうだいと申すは。長範は加賀の國熊坂といふ所に住み申されたる人なるが幼少の時より盗みをすき申されしが。ある時叔父の方に參り。藏の鍵を盗み申し。人々見つけ候へば。熊坂とつて逃げ申す。おつかけ申せば熊坂せつなかりけるか。田のあぜへ鍵を投げ捨つる。追手の者は鍵を拾ひ歸り申す。熊坂あとへ立ち歸り。鍵の跡にて合鍵をこしらへ。遂に藏へ忍び入り。色々寶物を盗み。遙の市に出であきなひ申し候へども。子細なきによつて。盗ほど世に面白き物はあるまじいと思ひ。人々を伴なひ諸國を盗みの修行にめぐり申すが。此青野が原につき。草深き處に忍びゆき。くる者を剝ぎ取り申され候。さる程に其頃都に金寶吉次信高と申して。商人の御座候が。毎年數多の寶を集め

高荷をこしらへ。東の方に下り申さるゝ折ふし。源氏義朝の御子牛若殿は。都鞍馬の寺にまし〳〵けるが。東の方に御下りありたきとて。吉次を御たのみあり一所に東へ御下りあり。すなはち此やどに着きたまふ。熊坂之を見て。あつぱれよき取物と思ひ。我に劣らぬしれものあまた伴なひ忍び入り申す。牛若殿御覽じて。小太刀をぬいて待ち給ふ。運の盡きたる盜人ども。牛若殿とは夢にも知らず。我も〳〵と切つてかゝる を。表に進む十三人切り伏せ給ふ。熊坂も心ほそう思ひ。長刀杖につきすご〳〵と引きけるが。物々しや其冠者が。切るといふとも何程の事のあるべきとて。さん〳〵に戰ひ候へども。肩と耳とのあいが二つになり。遂に空しくなり申されて候。

と語り終りてワキに向ひ。

出端にて後ツテ出づ

「總じて熊坂の長範の子細。さま〳〵御座ありげに候へども。我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。さて何と思しめし御尋ね候ぞ。ワキ「懇に御物語過分に存じ候。尋ね申す事餘の儀にあらず。おことより以前に。何くともなく出家一人來られ。今日はさる者の命日なり。愚僧に弔ひ候へと仰せられ候程に。伴なひ是まで參り候へば。熊坂の長範の事を身の上のやうに申しなし。忽ち姿を見失ひ候程に。草村となり候へば不審に存じ尋ね申し候。

と。是より例の文句ありてアトは引く。

ワキの待謠すみて出端となり。後ツテ長刀をかたげて出て。一の松にて留め。長刀突きて。「東南に風立つて西北に雲靜ならず」と歌ひ出し。「梢木の間や騷ぐらん」と右の方受け。面使ひて見渡し。「月は出てゝも朧夜なるべし」と。正面を東の心にて見上げ。ゆん手やめ

手に心を配つて」と長刀かいこみ指し分けして幕際まで行き。幕の方をとくと見て舞臺に入り。「婆婆の執心これ御覽ぜよあさましや」と。開きて長刀肩へもたせ面伏せて。みづから其非を悔いたる心を示す。

其時のさまを物がたる

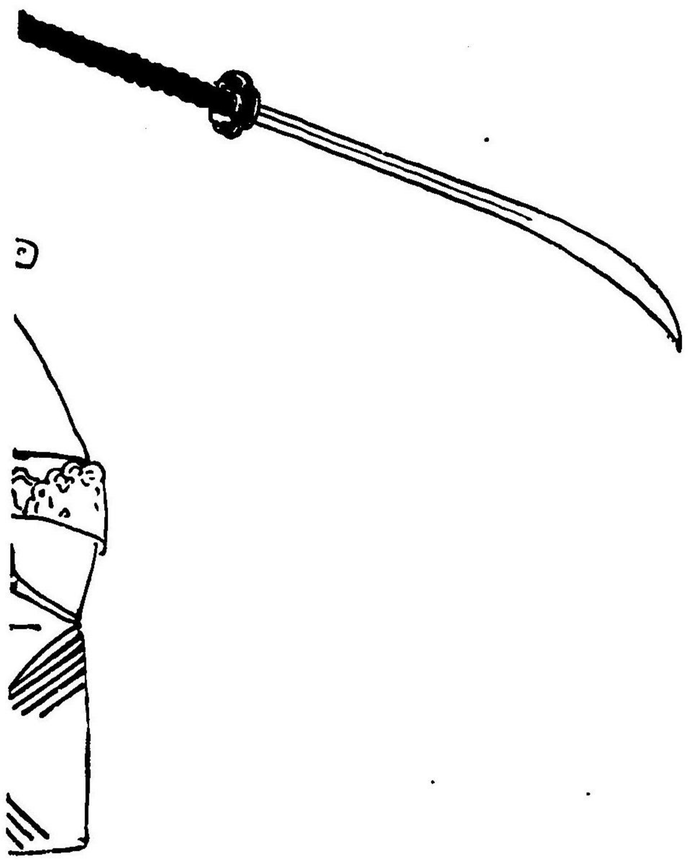
ワキには之を見て。熊坂の長範なるかと尋ね。さらば其時の有樣語つてきかせと所望す。シテは「さても三條の吉次信高とて。黃金を商なふ商人あつて」と歌ひながら眞ン中へ行きて床几に掛かり。討ち入るまでの物語。ワキと掛合さま〳〵ありて。シテ「牛若殿とは夢にも知らず。」ワキ「運の盡きぬる盜人ら。」シテ「機嫌はよきぞ。」ワキ「はや。」シテ「入れと」と面切りてしかとワキへあしらひ。地になりて。「いふこそ程も久しけれ」と据拍子踏み。返しに剝拍子ありて。「皆我先にと松明を。投げ込み〳〵亂れ入る。いきほひは。やうやく神も。面を向くべきやうぞなき」と。左の手にて松明を投げ込む

討ち入る形をなす

形を三度ほどなし。拍子ふみ。「然れども牛若子。少し恐るゝけしきなく。小太刀を拔いて渡りあひ。獅子奮迅虎亂入。飛鳥のかけりの手を碎き」と。長拍子などありて。「攻め戰へばこらへず。表に進む十三人。同じ枕に切り伏せられ。其外手負太刀を捨て。具足を奪はれはふ〳〵逃げて」と。右の方を低く長刀にて指し廻し。切り伏せられたる者共を見わたし。又立ちて橋掛の方に遠く。はふ〳〵逃げたる人々を見おくり。「熊坂いふやう。此者どもを手の下に。討つはいかさま鬼神か。人間にてはよもあらじ」と正面向き。驚きたる心の拍子踏み。「盜みも命のありてこそ。あらしようや引かんとて」と床几を立ち。正面の方へ出てゝ橋掛へ向き。「長刀杖に突き。うしろめたくも引きけるが」と。文句の通りの形をなし。仕手柱まで行き足留めて正面向き。「熊坂思ふやう」と歌ひ。「物々し其冠者が。切るといふともさぞあるらん」と勇氣を起して長拍子ふみ。「熊坂秘術を

長刀持ちて床几を立つ

ふるふならば」と又拍子ふみ。「いかなる天魔鬼神なりとも。宙につかんて微塵になし」と角へ行き。左の手に敵をつかんて大地へどうと投げ付くる形をなし。「討たれたる者共の。いて孝養に報ぜんとて。



美心圖

道より取つて返し」と左へ仕手柱の方へ廻り行き。「例の長刀ひきそばめ」と長刀を後の方へやり。「折妻戸をこだてに取つて」と左の手前へ出だし。ワキの方へ進み行き。「彼小男をねらひけり」と。足を留めとくと見。「牛若子は御覽じて。太刀ぬきそばめ物間を。少し隔てゝ待ち給ふ」といふ間に。右へ取り仕手柱の方へ廻り。「熊坂も長刀かまへ」と長刀を前に出だしてかまへ。「互にかゝるを待ちけるが」と少しワキの方へ進み。「いらつて熊坂左足を踏み。鐵壁も通れと突く長刀を。はつしと打つてゆん手へこせば。」合戰の形いろ〳〵ありて。「しさつて引けば右手へこすを。おつ取り直して丁と切れば。宙にて結ぶをほどく手に。かへつて拂へば飛び上つて。其まゝ見えず。形も失せて」と長刀さま〳〵に使ひ。目附柱まで長刀にて突き進みしが。牛若の動作早くして。ゆくへを見失ひたる心にて。さがしながら左へ廻り。こゝやかしこと尋ぬる處に。思ひもよらず後より。

長刀捨つ

具足の隙間を丁と切れば」と。正面へ出て。後より切られたる心にてづかりと安座し。「こはいかにあの冠者に。切らるゝ事の腹立ちさよと」と。飛び上りて後の方へ膝立て替へ。笛柱の方へ牛若の行きたるを見つけし心にて見送り。大小の前へ行き小廻して。「いへども天命の。運の極めぞ無念なる」と。膝一つ打ち而伏す。

倒れ伏す形を爲す

こゝに太皷の打ち出しありて。「打物わざにて叶ふまじ。手取にせんとて長刀投げ捨て」と。後見座へくつろぎ。長刀を後見に渡し。「大手を廣げて。こゝの眠廊かしこのつまりに。追つ掛け追つ詰め取らんとすれども」と。左右の手を大きく廣げ。左に右にと追ひ廻し。正面の方へ追ひ行きてははづれて前へ手を突き。立ちて「蜻蛉稻妻水の月かや」と見廻し。「姿は見れども手に取られず」と跡へ下りて兩手打ち合はせ。失望のさまをなす。

「次第々々に重手は負ひぬ」と歌ひ。「猛き心力もよわりよわりゆき

て」と膝突きて安座し。「此松が根の」と歌ひながら。目附柱の下の方を敎へ。「苔の露霜と。消えし昔の物語。後の世助けたび給へと」と。ワキへ合掌し。「夕つけも告げ渡る。夜もしら〳〵と赤坂の」と乘り込み。「松影に隱れけり」と左の袖にて顏おほふやうにして下に居。返しに拍子踏みて留むる。

善知鳥

前ジテ　老翁　小尉　尉髮　熨斗目着流　水衣　腰帶　扇

後ジテ　獵師の靈　獨男　黑頭　熨斗目　白水衣　腰帶　羽箒　杖　扇

ツレ　妻　女面　唐織着流

子方　千代童

狂言　旅僧　狂言上下　扇

ワキ　里樵　扇

角帽子　熨斗目　水衣　腰帶　扇　數珠

アヒ　處の者

子方ツレ出ツ　ワキ立山に登る

陸奥卒土の濱に善知鳥といふ鳥を常に捕りたる獵師ありしが。あまりに鳥獸を殺したる罪により。冥途にて苦しみを受くる有樣を作れる能なり。太皷なし。季節は四月。

大小座に着くと子方ツレ女出てゝ脇座にゆき下に居る。ワキ出てゝ。是は諸國一見の僧なるが。此度は陸奥卒土の濱一見と忘し。又よき序なれば。越中の立山にも登らんとするよしを述べ。

シテ呼び掛く

既に禪定をはりて山下に下る道すがらの謠ありて。脇座の方へゆかんとするを。シテ呼び掛けて出て。「陸奥へ御下り候はゝ言傳申し候べし。そとの濱にては獵師にて候ものゝ。去年の秋身まかりて候。其妻や子の宿を御尋ね候ひて。それに候簑笠手向けてくれよと仰せ候へ」といふ。ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。屆け申すべき事はやすき程の御事にて候さりながら。うはの空に申してはやはか御承引候べき」といへば。シテ「げにたしかなるしるしなくてはかひあるまじ」と。一の松にて留め面くもらし考へしが。「や」と面を上げ。「思ひ出てたりありし世の。今はの時まで此尉が。木賊の麻衣の袖をときて」と。水衣の左の袖を引きちぎりて兩手に持ち。「之をしるしにと。涙をそゝへて旅衣」と。ちぎりたる袖を顏にあてしをり。打切の間にワキ受け取りに來れば之に渡し。「立ち別れ行く其跡は。雲や煙の立山の。木の芽も萠ゆる遙々と」と。シテは幕

ワキに渡す

中入

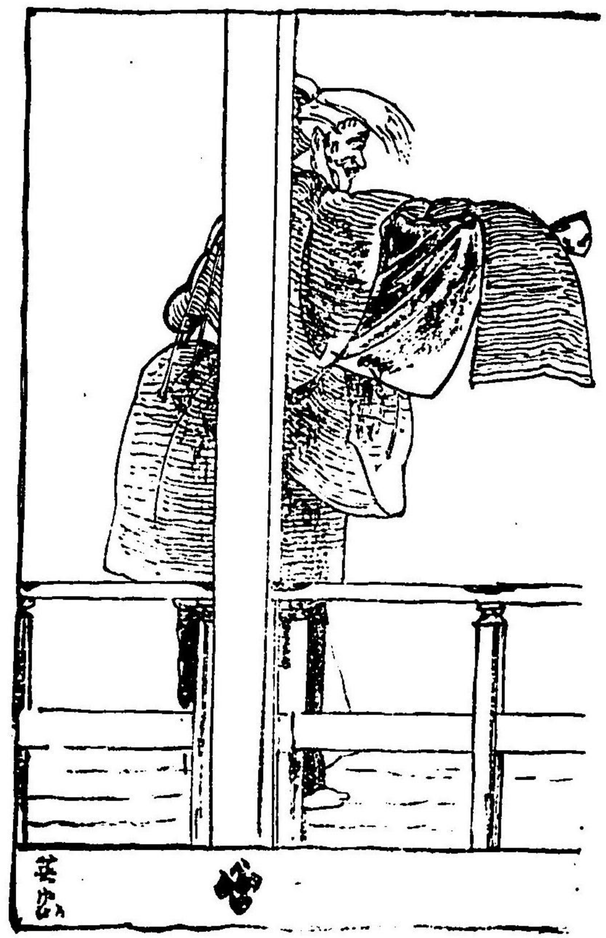
の方に歸り。「客僧は奥へ下れば」と舞臺に入るを。「亡者は泣く〳〵見送りて」とシテは立ち歸り見てしをり。「ゆく方しらずなりにけり」ときり〻と廻り開きて中入す。

ワキ狂言を呼び出だし。「是は諸國一見の僧にて候が。此處一見申し

能のしなり　五の卷

獵師の家なる図

て候。此處にて去年の春の頃身まかられたる獵師の屋は何くにて候ぞ」と問ふ。既に陸奥に着きたる心なり。狂言答へて。「さん候去年



の春身まかりたる獵師ならは。あの高もがりの屋の内にて候。又此外の善知鳥安方の鳥と申すは。同じ鳥にて候へども。子と親とにて名かはり候。其故は。善知鳥子を生まんとては此渚の眞砂に巣をせしかひこの上には砂をきせて置けば。かひを割り候。親鳥餌を運びて。子のあり處を知らて。上をうとふ〳〵と鳴きて通り候へば。子は親の聲を聞いてやすかた〳〵と鳴く。親鳥も我子の聲と聞き餌を乞ふと申し候。然るによつて善知鳥とは親鳥をいひ。安方とは子を申し候。かの獵師は善知鳥の鳴く眞似をよく似せ候ひて。此渚を通り候へば。やすかた〳〵と鳴くを聞きつけて取り。又親鳥を安方になりて取り。悉皆これのみにて世路を營み申したると承り候」と語る。

ワキは禮を述べてくつろぐ間に。ツレ「げにやもとよりも定めなき世の習ひぞと。思ひながらも夢の世の。あだに契りし恩愛の。別れ

ワキ案内を乞ふ

の跡の忘形見。それさへ深き悲しみの。母の思ひを如何にせん」と。歌ひつゝ悲しみ居る處に。ワキ來りて案内を乞ひ。立山にてありたる事を委しく語り。「うはの空に申してはやはか御永引候べきと申して候へば。その時召されたる麻衣の袖を解きて給はりて候程に。是まで持ちて參りて候。もし思召しあはする事の候か」といふ。ツレ「是は夢かや淺ましや。してのたをさの亡き人の。上聞きあへぬ涙かな」としをり。「いさや形見を簑代衣。間遠に織れる藤袴」と歌ひながら。亡き人の形見なる衣の心にて。先にシテの着たりし水衣の片袖なき物を兩手に持ちてワキに見すれば。「頃も久しき形見ながら」とワキもかの片袖を出だして見せ。ツレ「今取り出だし。」ワキ「よく見れば」と。ツレは衣と袖とを一つに重ねて見。「疑も。夏立つ今日の薄衣。〳〵。一重なれども合はすれば。袖ありけるぞあらなつかしの形見や」と。再び衣を見て打ちしをる。「中に亡者の望むなる。

初同

簑笠をこそ手向けたれ」と。ワキはツレの側にある笠を取りて正面先に持ち行き。下に置き。「南無幽靈出離生死頓證菩提」と合掌回向し。終りてツレの下に座着く。

一聲にて後ジテ杖突きて出て。仕手柱先にて歌ひ出だし。「衆罪如草露惠日の日に。照らし給へ御僧」と。ワキへ合掌し。「處は陸奥の。奥に海ある松原の。下枝にまじる鹽蘆の。末引きしをる浦里の」と。正面へ出て。「雛が島の苫屋形」と向ふを見やり。「圍ふとすれどまばらにて。月のためにはそとの濱」と左へ廻り來りて。「心ありける住居かな」と脇正面へ向き杖にもたれて見渡し。景色のよさに見とれたる心なり。

一聲にて後ジテ出づ

シテ感悔す

ツレは之を見て「あれはともいはゞ形やきえなんと。親子手に手をとり組みて」とツレも子方も立ち。「泣くばかりなるありさまかな」とツレはしをりてすわり子方はシテに向ひて立ちをる。シテ「あはれや

子方の髪を偽てんとす

げに古へは。さしも契りし妻や子も。今は善知鳥の音になきて。安方の鳥のやすからずや。何しに殺しけん。我子のいとほしきが如くにこそ。鳥獣も思ふらめと」と子方に向き。「千代童が髪をかきなでて」と右の手を上げて髪をなづるやうの形をなし。「あらなつかしやといはんとすれば」と。子方の前へつか〳〵と行きしが。俄に氣をかへて。「横障の。雲の隔てか悲しやな」と正面むきてしをり。「今まで見えし姫小松の」と大小前へゆき。「はかなや何くに。木隱笠ぞ沖の國の」と正面に手向けたる笠をよく見。和田の笠松や箕面の。瀧つ波も我袖に」と左の袖を見て。「立つや卒都婆のそとは誰」と拍子ふみ。「箕笠ぞ隔てなりけるや」と又笠を見。「松島や。をじまの苫屋うちゆかし」と右へ廻りて。「我はそとの濱千鳥」と右を受け。「音に立てゝ。泣くより外の事ぞなき」と。正面むき打ちしをりながら下に居る。

クセ

カケリ

クセになりて「末の松山風あれて。袖に波越す沖の石」と。右の方受けて遠く見。「又は干潟とて」と正面直し。「千賀の鹽竈身を焦がす報をも忘れける。事業をなしゝ悔しさよ」と。兩手打ち合はせて打切に立ち。「そも〳〵善知鳥安方のとり〳〵に」と仕手柱へ行き。「木々の梢にも羽を敷き」と正面出てゝ脇正面高く見まはし。「波の浮巣をも掛けよかし」と下を見て角へゆき。「平沙に子を產みて落雁の」と。又下を見。「はかなや親は隱ずとすれど」と左へ廻り橋掛の方へ行きかゝるを。「うとふと呼ばれて」と足を留め。「子はやすかたと答へけり」と呼びもどさるゝ心にて正面むき。「さてぞ取られ安方」と拍子一つ踏み。「うとふ」と右受けしをりながら歌ひ。正面直し杖突きてカケリとなる。カケリは生前の殺生の有樣をあらはす所作にて。まづ脇座の方に鳥の隱れ居るを認め。杖を上げてねらひより。一つ打ちて追ひ出だしたるが。幕の方さして飛び行きたる心にて。とく

と見おくり。それより杖つきながら橋掛にゆき。幕の方より見まはして一の松の前あたりに居るを見つけ。又前の如く杖上げて打ち出だし。此度は舞臺の方に飛び行きたるを。追ひかけて笠の處に至り。杖にてチョン〳〵と打ち。トコトンと拍子ふみて。「親は空にて血の涙を」と跡へ下りて上を見。杖を捨て正面先に出でゝ笠を持ち。「笠を傾けこゝかしこに。たよりを求めて隱笠」と。兩手にてさし上げかづくやうにして左右し。正面にて下に居り。「かくれ簑にもあらざれば。猶ふりかゝる血の涙に」と。角にて笠かざし見て。「目も紅に染みわたるは。紅葉の橋のかさゝぎか」と。左へ廻り笠を角の方へ高く投げ捨て見て。扇ぬき持ち。「婆婆にては。うとふ安方と見えしも」と据拍子あり。「冥途にしては怪鳥となり。罪人を追つ立て黑金の。嘴をならし羽をたゝき」と。扇にて罪人を追つ立つる形。扇を廣げ兩手打ち合はせて。羽ばたきする形などありて。「赤金の爪を磨ぎ立てゝは。眼をつかんでしゝむらを」と。左の手にて我眼をつかみ出す形をなし。「叫ばんとすれども猛火の煙に。むせんで聲を上げ得ぬは」と。角にて扇巻き込み顔にあてゝ左へ廻り。「逃げんとすれど立ち得ぬは」と。角へつか〳〵と行き。直にたら〳〵と下りて。「羽ぬけ鳥のむくいか」と。臥膝して安座し。「うとふは却つて鷹となり」と歌ひ。「のがれ交野の狩場の雪吹に」と立ちて正面へ出で。「空も恐ろし」と上を見。「地を走る」と下を指し。「犬鷹に責められて。あら心うとふ安方」と右へ廻り。「安き隙なき身の苦しみを。助けてたべや御僧」と。胸ざしゝて脇座の方へゆき拍子ふみ。返しに仕手柱へ乘り込みて例の如く留むる。溢き内に情あり趣ありて雅味なかゝいふべからざる能ぞかし。

項羽

前ジテ　船頭
笑尉　尉髪　髪斗目若流　水衣　扇さし棹持つ
後ジテ　項羽
霊　黒頭　唐冠　厚板　半切　法被
腰帯　扇　鉾
ツレ女　虞氏
女面　唐織若流　側次
ワキ　草刈男
髪斗目　大口　水衣　腰帯　扇　草花
ワキツレ二人　草刈男
ワキに同じ

アヒ　渡守
狂言上下　扇

次第にてワキ出づ

草刈りて歸る人々烏江野を過ぎて渡舟に乘りたるに。楚の項羽の幽靈あらはれ來りて。漢の高祖と戰ひて敗れし時の物語をなし。其時の有樣を見するといふ事を作れる能なり。太皷あり。

季節は初秋。地は唐土。

次第にてワキおよびワキツレ二人出づ。おの〳〵竹に挾みたる草花をかたげ草刈の躰なり。「ながめ暮らして花に又。〳〵。宿かる草を尋ねん」の謠すみて。「是は烏江の野邊の草刈にて候。今日も草を刈り只今家路に歸り候」の名乘あり。又「草かる男野を分けて。草を刈るとや思草。家づとなれば色々の。草花の數を刈り持ちて。歸れば跡は秋くれて。枯野にすだく虫の音も。花を惜しむか心あれ」と。歌ひ終りて便船を待つべきよしをいひて。一同に脇座にゆき立ち居

一撃にてシテ出づ

る。

シテ一撃にて出て。仕手柱に立つと後見ゆきて棹を持たす。船の作物は出ださねど舟に乗り居る躰なり。「蒼苔道なめらかにして僧寺に歸り。紅葉馨かわいて牡鹿なくなる夕まぐれ。心もすめる面白さよ」と。秋のけしきを賞する心ありて。「秋毎に。野分を舟の追手にて」と歌ひ。舟を出ださんとするをワキ見て。「なふ〳〵其舟に乗らうずるにて候」と呼び掛く。シテ「あふ召され候へ。さて船賃は候」と問ふ。ワキ「我等如きの者の船賃まゐらせたる事はなく候」と答ふ。シテ「船賃なくは此舟に叶ひ候まじ」と斷る。ワキ「さらば上の瀬へ廻らうずるにて候」と行きかゝるを。シテ「なふ〳〵道理は申しつ舟に召され候へ」と引き留めていふ。「乗りおくれじと草刈は。もとの渚に立ちよれば」とワキ二三足いづると。シテは「とく乗り給へとさしよする」と。右の手を棹に掛けて舟さしよする形をなし。

ワキ呼び掛く

ワキ船に乗る

ワキは乗り込む心にてシテの前にすわり。ワキヅレは立ちたる處に下に居る。ワキ一人に舟に乗る形を代表させたるなり。

「露刈りこめて秋草の。葉毎に影宿る」と。シテはワキのすわる時前に置きたる草花を見。「月をや舟に乗せつらん」と月を見上げ。「水音なしに行く舟の。水馴棹をさゝうよや。みなれ棹をさゝうよ」と。又棹に手を掛けてさす形をなし。「舟が着いて候御あがり候へ」といひてワキの上るを見。「さて船賃は候」と又いふ。ワキ「其ためにこそ向にて申し定めて候に。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。」ワキ「いや船賃と申せばとて別つ子細にても候はゞこそ。それほど多き草花をなど一本給はり候はぬぞ。」ワキ「あらやさしや。いづれにても候へ召され候へ」と聞きて。棹を捨て舟を出てゝワキの前にゆき。ワキの持ちたる花の中より赤く美しきを一もと抜き出だし。「さらば此花を給はらうずるにて候」といへば。「ふしぎやな是ほど多き草花の

美人草を所望す

中に。何とて其花をば撰つて召され候ぞ」と問ふ。シテ「さん候これは美人草と申して故ある花にて候。」ワキ「あら面白や美人草とは。何と申したる謂れにて候ぞ。」シテ「これは項羽の后虞氏と申せし人の。身を投げ空しくなり給ひしを。取りあげ土中に突き込め候へば。其塚より生ひ出でたる草なればとて。さて美人草とは申し候。」ワキ「さらば項羽高祖の戰のやうを御存じ候はゞそと御物語り候へ。」シテ「さらば語つて聞かせ申し候べし」と。是より眞ン中にゆきて座し。物語となる。

「さても項羽高祖の戰ひ。七十餘度に及ぶといへども。始は項羽打ち勝ち給ひ。一度も高祖の利なかつしに。ある時項羽の兵心がはりし。かへつて項羽を狹めつゝ。四面に鬨の聲をあぐれば。虞氏は思ひに堪へかねて。如何はせんと伏し給ふ。又望雲騅といふ馬は。一日に千里をかける名馬なれども。主の運命つきぬれば。膝を折つて

一足もゆかず。其時項羽はちつとも騒がず。馬よりしづ〳〵とおり立つて。いかに呂馬童。わが首とつて高祖に捧げ。名をあげよやと呼ばゝれども」、とシテ語り。地にわたして。「呂馬童は。恐れて近づかず。不覺なる者の心かな。是見よ後の世に。語り傳へよといひあへず。劔を拔いてあへなくも」と。扇を出だし劔の心にて見。「我と我首をかきおとし」と。扇を上げて首を指し。「呂馬童に與へ其まゝ。此原の露と消えにけり。望雲雕は膝を折り。黄なる涙を流せば。さのみ語れば我心。昔にかへる身の果。今は包まじ我こそは。項羽が幽靈あらはれたり」と。立ちて仕手柱の方へゆき。「跡とむらひてたび給へ」とワキに開き。返しにて中入す。

中入

シテ鏡の間に入り幕おりると。アヒ立ちて名乘座に出て

アヒ

「これは此處の渡守にて候。今日も罷り出で。人々を渡さばやと思ひ候。

といひてワキを見つけ。

「や。これなる方々は此舟には何とて御乘りなされて候ぞ。

といふと。

ワキ「これは船頭にかり渡り候よ。

アヒ「いや此舟は我等の舟にて候に。僞りを御申し候。

ワキ「しかと船頭にかりて候。それにつき不審申したき事の候。

かう御通り候へ。

アヒはワキの前へゆき下に居て。

「さていかやうなる御事にて候ぞ。

ワキ「つきなき申事にて候へども。美人草の子細御存じ候はゞ御物語り候へ。

アヒ「これは思ひもよらぬ事を御尋ね候ものかな。委しき事は存じ申さず候へども。あらし〳〵語つて聞かせ申し候べし。

といひて正面むきカタリとなる。

「さても項羽高祖の戰ひと申すは。秦の始皇帝崩御の後。項羽高祖談合なされ。秦の國を取り給はうずるとの御事にて。其時の御約束には。早く咸陽宮に入りたる方その國の王に備はり。又遲く入りたるかた臣下となるべしと。固く御約束なされ。東西へ分ち攻め入り給ひたると申す。高祖は人をも切らず亂暴をもせず。せいすゐにありたるにより。秦の都へ早く入り給ふ。又項羽は在々所々を燒き。民を惱まし財物を貪り給ふにより。敵たひ申せばそれに時日うつり。都へ遲く入り給ふ。すなはち咸陽宮も燒け亡ひ申し。其時前の約束相違仕り。項羽高祖の戰ひとなり申し。七十餘度の合戰に項羽一度も御負けなきよし承はる。然れば高祖の臣下。樊噲張良紀信周勃など申す人。餘りに口惜しく存じ。色々智略をめぐらし。

項羽の兵どもを呼び取り申され候。さて高祖いつもの如くかけ出て給ふ。項羽も又出て向ひてすなはち敵陣を御覽ずれば。味方の兵ども心がはりし寄せ來ると御覽じ。城塚へ取り籠り御戰ひなさるゝが。多勢に無勢かなひ申さず。我と我首をかき落し空しくなり給ふ。また虞氏君と申すきさきも。御身を投げ空しくなり給ふ。中にもあはれをとゞめたるは。望雲騅と申す天馬にてありたると申す。是は一日に千里をかくる名馬なるが。項羽の別を悲しみ一足も引かず。黄なる涙を流し膝を折り歎きたると申す。虞氏の死骸を上中につきこめ申せば。其塚の上より花一本生ひ出て申す。然る間こざかしき者の申すは。みめよき人の廟所より生ひ出てたる草花なれば。美人草と申しならはし候。草刈達も心ありける人は。花をばよきて刈り給へや。我等の承りたるはかくの如くにて候。さ

て何と思ひよりて尋ね給ふぞ。

といへば。

ワキ「慇に御物語祝着申して候。尋ね申す事餘の儀にあらず。最前其舟借し給ふ舟人。舟賃を乞はせ給ふに。いかゞと申して候へば。草花を御乞ひ取りなされて候に。取り分き美人草を撰り取り給ふ間。不審に存じ。色々言葉をかはし候へば。其身の物語とひとしく。項羽高祖の軍の子細。又虞氏の事を申され。其後項羽が幽霊なるよし申され。かき消すやうに失せて候間。さて尋ね申す事にて候。

是より常式の問答二つ三つありて。アヒは引く。

一畳臺正面先に出て。ワキの待謠すみて。出端になり。ツレ女先づ出て。舞臺の真ン中に立ち居る。後ジテその跡よりつゞきて出て。一の松にてかたげたる鉾を前に出だし見て突き立て。「昔は月卿雲客

出端にてツレ出て後ジテ出づ

うちかこみ。今は樵歌野田の月。爛漫霧ふかし古松下の蔭」と歌ひ。「紫の雲間よこぎる出立は」と頭とり面使ひ。「天津乙女の調めかな」と開き。「おの〳〵伎樂は奏しつゝ」と拍子ありて。「四面に時の聲をあぐれば」と。袖返し指し分けして鉾をかいこみ。右に廻りて。「又執心の攻め來るぞや」と幕の方をしかと見込み。「あら苦しの苦患やな」と鉾を突き。肩にもたせて面晝らす。

「虞氏は思ひに堪へかねて」とツレ歌ひ。その返しより正面へ出て臺に上り。「落つるはさながら涙の雨の」と。「高樓にのぼりて」と臺の向ふへ下り。膝つ打ちしをり。「身を投げ空しくなり給へば」と臺の向ふへ下り。膝つきて直に脇座へ行き下に居ると。シテは虞氏の臺に上るを見て。つか〳〵と欄干際まで出て。見て居たりしが。身を投げ空しくなりたるを見て急ぎ舞臺へ入り。舞働となりて臺へ飛び上り。鉾の柄にて左より右へ。右より左へ虞氏の死骸をさぐり見る形をなし。臺より

ツレ女おりる

舞働

キリ

飛びおり大小前にて小廻し。又臺へ飛び上りて鉾を突く。立ちても居てもあられぬさまなり。英雄の心緒亂れて糸の如しとやいふべき。「項羽は虞氏が別れて我身の」と歌ひ。「なりゆく草葉の露もろともに。消え果てし悲しさ」と身を投げたる處を見おろし。「おもひ出づれば劍も鉾も皆投げ捨てゝ」と。鉾をうしろに捨て。「身をたくばかりに口惜しかりし」と兩手組みソリガヘリして安座し。「夢物語ぞあはれなる」と居立ち左の袖かへしてワキへ向き。「あはれ苦しき嗔恚のほのほ」と正面直し。扇ひらきて。「立ちあがりつゝ味方を見れば」と立ちて仕手柱の方を見。「高祖に屬して寄せ來る波の」と拍子ふみ。「あらき聲々きけば腹立ち」とイウケン扇して胸中の憤怒を示し。「いて物見せんと自らかけいて」と胸ざしゝて臺を飛び下り。「敵を近づけ」と招扇し。「取つては投げつけ」と兩手にて敵を仕手柱の際にて捕へ。正面へ投げつくるやうにし。「又はねぢくび取り〳〵に。恐ろしかりける勢なれども」と。右の扇を首の心にて左の袖かへして押さへ。直に立ちて角より脇座の方へゆき。仕手柱へ乘り込みて飛び返り。「土中の塵とぞなりにける」と袖かづきて留むる。勇壯なる内に悲哀の心あり。

盛久

シテ　主馬盛久
直面　厚板　大口　腰帶　クサリ　扇　數珠　經
後に侍烏帽子　掛直垂　小サ刀
ツレ　土屋三郎
梨子打烏帽子　白鉢卷　直垂上下　腰帶　小サ刀　扇
ワキヅレ　太刀取
梨子打烏帽子　白鉢卷　厚板　大口　腰帶　側次　扇

トモ二人　輿かき
厚板　大口　腰帯　扇さす

シテ出づ

幕上るとシテ「いかに土屋殿に申すべき事の候」と呼び掛けながら出て來る。輿かきは左右に輿の作物を差し掛け。ワキは後につきて「何事にて候ぞ」といひつゝ進み。ツキヅレ又その跡より進めり。シテは右の手に水晶の數珠を持ち。經文を懷中す。シテ「只今關東に下りなば。是が限りなるべし。清水の方へ輿を立てゝ給はり候へ。」ワキ「それこそ安き御事。いかに面々。東山の方へ輿を立てられ候へ」と。此問答の内にシテは一の松まて來り。舞臺の方少し受けて立ち居り。謠すみて舞臺に入り。眞ん中にてすわり「南無や大慈大悲の觀世音さしも草。さしもかしこき誓の末。一稱一念なほ頼みあり。ましてや多年値遇の御結緣空しからんや。あら御名殘をしや」と。清水の觀音に御暇乞をする心にて謠ふ。この間は輿よりおりた

清水の方に向ひ歌ふ

る躰にて輿の作物も後ろにのけてあり。かくて「いつか又。清水寺の花ざかり」と歌ひ。都の名殘までも惜しまるゝ感慨を寄す。あはれなる處なるを。誰やらん花ざかりの文句を調子張り上げ歌ひて。それにては花見の人の謠になりて。哀傷を帶びたる心は更に聞えずと。觀世太夫に叱られしといふ話もあり。謠本にある節の通を歌ひたるのみにては謠にならぬ事。これにても知るべし。「かへる春なき名殘かな」と立ちて。又輿にのる心にて輿の屋形をさしかけさせ。サシを歌ひ地にて受く。此間に都を出で東海道にかゝる心にて。白河松坂四の宮河原などを過ぐる文句ありて上歌となり。「是や此。ゆくも歸るも別れては。〳〵。知るも知らぬも逢坂の關守も。今の我をばよも留めじ。瀨田の長橋うちわたり。立ちよる影は鏡山。さのみ年へぬ身なれども。衰へは老曾の。森を過ぐるやみのをはり。熱田の浦の夕汐の。道をば波に隱されて。廻れば野邊に鳴海潟。また八橋や

又立ちて道中となる

高師山。〈」と。舞臺より橋掛へゆき一度幕際までゆきて一の松に來り。前の如く立ちてロンギとなる。なほ道行の文句なり。

ロンギ

地「汐見坂橋本の。濱名の橋を打ち渡り。」シテ「旅衣。かく來て見んと思ひきや。命なりけりさよの中山は是かとよ。」地「かはる淵瀬の大井川。過ぎゆく波も宇津の山。」シテ「越えても關に清見潟。」地「美保の入海田子の浦。打ち出でゝ見ればましろなる。雪の富士の嶺箱根山」と一同舞臺に入り。「猶明けゆくや星月夜。早鎌倉に着きにけり。〈」と正面向きて留め。輿かきは輿をおろして囃子方のうしろにくつろぎ。シテは地謠の前に床几にかゝる。

鎌倉に着く

昔し觀世流にては。是までの處を除き是より以下のみしたる事もあり。それはロンギのあたりにや勸めてゐたりしシテの急病にて倒れたる事ありしにより。忌みたりしとぞ。故に古き能の書物などに。觀世流には盛久の道行なしなど書きたるもあり。

シテ「夢中に道あつて塵埃を隔つ。げにやそことも知らざりし。山を越え水を渡つて。此關東に着きぬ。百年の榮化は塵中の夢。一寸の光陰は砂裏の金。げにや故郷は雲井のよそ。千代もと契りし友人も。かはる世なれや我ひとり。鎌倉山の雲霞。げにかゝる身のならひかや。かくてながらへ諸人に面をさらさんより。天晴とう切らればやと思ひ候」といふを。ワキは仕手柱に立ちて聞き。「あら痛はしや盛久の獨言を仰せ候」といひてシテの方に行き下に居て。「いかに申し候。土屋が參りて候」といへば。シテは序几を離れて下に居。「土屋殿と候やこなたへ御入り候へ」といふ。ワキ「御下向のよしを披露申して候へば。急ぎ誅し申せとの御事にて候」と告ぐ。シテは答へて。「かくてながらへ諸人に面をさらさんよりも。天晴とう切らればやとの念願。さては早かなひて候よ」と語り。「さて最期は只今にて候か」と問ふ。御最期は此曉か明夜かと仰せ出だされたるよしを

述懷す

最期を告ぐ

告ぐれば。さては暫くの時刻なりとて。日頃忘らざりし觀音經を今日は未だ讀誦せざれば。御暇を給はりて之を讀誦したしといふ。さらば土屋も是にて聽聞せんといはれ。シテは懷中より經文を出だし戴きて之を開き讀み。「惑遭王難苦。臨刑欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞」と再びおし戴き。ワキとの問答地の謠さま〳〵ありて。「盛久が遂の道。よも暗からじ頼もしや」と面伏せ。「あら不思議や」と面上げて。少し睡眠の内に。あらたなる靈夢を蒙りて候はいかに。あらありがたや候」と面伏せて感謝の心を示す。

經文を讀誦す

刑場に臨まんとて立ち出づ

ワキ「既に八聲の鳥鳴いて。御最期の時節只今なり。はや〳〵御出て候へとよ」と告ぐるを聞き。「待ち設けたる事なれば。左には金泥の御經。右には思の珠の緒の。命も今を限りなれば。是ぞ此世を門出の庭に。足よわ〳〵と立ち出づる」と。左右の手なる經と數珠とを見。静に立ちて始の如く輿さしかけさせ。ワキ「武士前後を圍み

由比の汀に着く

つゝ。是ぞ別れの鳥の聲。」シテ「鐘も聞うる東雲に。」ワキ「籠より籠の輿にのせ。」シテ「由比の汀に。」ワキ「急ぎけり」と。掛合に謠ひ。「夢路をいづる明ぼのや。〳〵。後の世の門出なるらん」と。次第の間に舞臺を一度まはりて異ン中にゆき。正面むき足とむると。輿かきは直に入り。「さて由比の汀に着きしかば。座敷を定め敷皮敷かせ。早々直らせ給ふべし」とワキの謠ありて。「盛久やがて座に直り」と。正面へ少し出てゝ大口の後ろを取り下に居て。「清水の方はそなたぞと。西に向ひて觀音の。御名を唱へて待ちければ」と。シテは經文を抜き。ワキヅレは「太刀取うしろに廻りつゝ。稱念の聲の下よりも。太刀ふりあぐればこは如何に」と。抜きたる太刀を振り上げてシテの前に落し。「御經の光り眼に塞がり」と兩手を目に當て。「取り落したる太刀を見れば。二つに折れて段々となる」と捨てたる太刀を見。「こはそも如何なる事やらん」といふと。「盛久も思の

切らんとせし太刀折る

ワキと共に再び讀経す

盛久

外なれば。たゞ茫然とあきれゐたり」と經文を下げて心持あり。それよりワキと同音に臨刑欲終以下の文を唱ふる事ありて。「經文あらたに曇りなき」と經を見。「劍段々に折れにけり」と居立ちて太刀を見。「末世にてはなかりけり。あら有難のお經や」といたゞきて打切に懐中す。

「やがて此由きこしめし。

召されて鎌倉に參る

急ぎ御前に參れとの。御使度々に重なれば」と辭儀して。「召しに從ひ盛久は。鎌倉殿に參りけり。〳〵」と。後見座にくつろぎ。經も數珠も後見に渡し。クワラを脱ぎ。掛直垂に少サ刀さして侍烏帽子を着。仕手柱先へ出掛くると。ワキ「いかに盛久御前にて候」といふ。シテは下に居て兩手つく。

盃を受く

かくて君も御靈夢の御告ありしとて。盛久にも見けるかとの御尋ありとて。御信感かぎりなきにぞ。「その時盛久は。夢のさめたる心地して。感涙をとめかね。御前を罷り立ちければ」と。しをりながら立ちて仕手柱の方へゆくを。「いかに盛久しばしとて。御簾を上げて召されれば」と。召しかへさるゝ心にて本の座に歸り。「せんかたもなき磨久が」と正面むき下に居て辭儀をなし。「命は千秋萬歲の春を祝ふぞと。おん盃を下されれば」と。ワキの酌に來るを扇ひらきて

男舞

受け。「種は千代ぞと菊の酒」と祝言をうたひ。「花を受けたる袂かな」と地にて繼ぎ。ワキ又「いかに盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊には亂舞堪能のよし聞し召し及ばれたり。一年小松殿。北山にて芦狩の遊路の御酒宴において。主馬の盛久一曲一かなでの事。關東までも隱れなし。殊更これは歡びの折なれば。唯一さしとの御所望なり急いで仕り候へ」といへば。シテは「有難し〳〵。得がたきは時。去りがたきは貴命なり。盛久かゝる時節にあふ事。世もつて例あるべからず」と答へ。「治まり靡く時なれや。一天四海の内のみか。人の國まで日のもとの。もろこしが原も此ところ」と。正面むきて歌ひ。居立ち露とり達拜して男舞となる。

「舞すみ酒宴なかばの春の興」と歌ひて。あと大左右打込して開き。

「君を祝ふ千秋の。鶴が岡の松の葉の」と出でゝ開き。「ちりうせずして正木のかづら」と下をさしまはし下に居て。「長居は恐れあり」

と。辭儀をなし。「まかり申し仕り」と立ち。退出しける盛久が。心の内ぞゆゝしき」と。仕手柱へ廻り來りてイウケン扇をなし。例の如く拍子踏みとむる。ある人いふ。盛久の能は。敵に捕へられ殺されんとせし者が。佛の加護により命助かりたりとて。喜びて舞を舞ふなど。武士の恥づる處ならずや。故におのれは盛久ほど嫌なる謠なしと。又ある人のいふ。物は見やうによるべし。盛久いかに柔弱なる平家の侍なりとて。いやしくも亂世の武士たるものが。さる卑怯未練の心やは持つべき。賴朝の信仰を知りたるが故に。われも同じ信仰を裝ひて命たすかり。いはるゝがまゝに舞をも奏して。一時敵の心をゆるませ。大いに他日に復讐する心ありしならんも知るべからず。かく見る時は面白き能ならずやと。見る人々の心々は如何に。

遊行柳

作物　山に柳

前ジテ　老翁　阿痴附　附髭　熨斗目着流し　水衣　腰帶　數珠　扇

後ジテ　柳の精　鐵附　風折烏帽子　白垂　大口　狩衣　腰帶　扇

ワキ　遊行上人　角帽子　熨斗目　大口　水衣　腰帶　數珠　扇

ワキツレ二人　ワキに同じ　從僧

アヒ　處の者　長袴上下　扇

遊行上人。教へを全國に廣めんとて。陸奥へ下る道に。名木の

柳の精の顕はれ出づるに逢ひ。稱名を授くる事を作れる能なり。

太皷あり。季節は秋。地は陸奥。

山に柳の枝さしたる作物を大小前に出だして朽木の柳にかたどる。

作物出づ

次第にてワキ出で。舞臺に入りてワキヅレ二人と向き合ひ。「歸るさ知らぬ旅衣。〳〵。法に心や急ぐらん」と歌ひ。ワキ正面向きて。

次第にてワキ出づ

「是は諸國遊行の聖にて候。我一遍上人の教へを受け。遊行の利益を六十餘州に弘め。六十萬人決定往生の御札を。普く衆生に與へ候。此程は上總の國に候ひしが。是より奥へと志し候」と名乘り。此間ワキヅレは下に居る。それより又立ち向き合ひて道行を歌ふ。終りて白川の關をも過ぎたるよしの文句ありて。「又是にあまた道の見えて候。廣き方へ行かばやと思ひ候」といひて。脇座の方へ行きかゝると。シテ幕を上げさせ。「なふ〳〵遊行上人の御供の人に申すべき事の候」と呼び掛け出て來るを見て。「遊行の聖とは札の御所望にて

シテ呼掛にて出づ

候か。老足なりとも今少し急ぎ給へ」とワキいへば。シテは「ありがたや御札をも給はり候べし。先づ先年遊行の御下向の時も。古道とて昔の海道を御通り候ひしなり。されば昔の道を數へ申さんとて。遥々是まで參りたり」とシテいひ。「不思議やさては先の遊行も。此道ならぬ古道を。通りし事のありしよなふ」とワキいひ。「昔は此道なくして。あれに見えたる一村の。森のこなたの川岸を。お通りありし海道なり。其上朽木の柳とて名木あり。かゝる尊き上人の。御法の聲は草木までも。成佛の緣ある結緣たり」とシテ述べ。「こなたへ入らせ給へとて。老いたる馬にはあらねども。道しるべ申すなり。急がせ給へ旅人」とワキへ二足詰めて左の手出だす。趣ある處なり。初同になりて。「昔を殘す古塚に。朽木の柳枝さびて」と作物を見上げ。「蔭ふむ道は末もなく」と正面直して。「風のみ渡る景色かな」と跡へ下り正面を見る。

朽木の柳を教ふ

シテ「是こそ昔の海道にて候へ。又是なる古塚の上なる柳こそ朽木の柳にて候よく〳〵御覽候へ。」ワキ「さては此塚の上なるが名木の柳にて候ひけるぞや。げに川岸も水絶えて。川そひ柳朽ち殘る。老木はそれとも見え分かず。蔦かづらのみはひかゝり。青苔梢を埋むありさま。誠に星霜年ふりたり。さていつの世よりの名木やらん。委しく語り給ふべし。」シテ「昔の人の申し置きしは。鳥羽の院の北面。佐藤兵衛憲清出家し。西行と聞えし歌人。此國に下り給ひしが。頃は水無月半ばなるに。此川岸の木のもとに。暫し立ちより給ひつつ。一首を詠じ給ひしなり。」ワキ「いはれを聞けば面白や。さてさて西行上人の。詠歌は何れの言の葉やらん。」シテ「六時不斷の御勤めの。ひまなき内にも此集をば。御覽じけるか新古今に」と詰足し。地になりて。「道のべに。清水流るゝ柳陰。〳〵。暫しとてこそ立ちどまり」と。靜かに正面へ出て足とめて下に居。「殘る老木はなつか

西行の歌を語る

中入

しや」と面伏せ心持ちあり。「かくて老人上人の。御十念を給はり」とワキへ合掌し。「御前を立つと見えつるが」と立ちて右へ廻り。「朽木の柳の古塚に。よるかと見えて失せにけり」と作物の右の方によりて開き。返しに作物へ中入す。此前シテ杖を突く時は「御前を立つと」と右へ廻り作物を見て捨て。直に作物に入る處中々趣あり。されど突かぬが通例なる如し。近年梅若實のを見たれども。杖なかりき。

出端にて歌ひ出だす

ワキの待謠すみて出端となり。シテ作物の内にて床几に掛かり。「沅水羅紋海燕かへる」と歌ひ出だし。「髪も亂るゝ白髪の老人。忽然とあらはれ出でたる烏帽子も。柳さびたる有樣なり」と引廻おるゝ。

ワキと問答す

ワキ「不思議やなさも古塚の草深き。朽木の柳の木のもとより。そのさま化したる老人の。烏帽子狩衣を着しつゝ。顯はれ給ふは不審なり。」シテ「何をか不審し給ふらん。はや我姿はあらはし衣の。日

も夕暮の道しるべせし。其老人にて候なり。」ツキ「さては昔の道しるべせし。人は朽木の柳の精。」シテ「御法の教へなかりせば。非常無心の草木の。うてなに至る事あらじ。」ツキ「中々なれや一念十念」シテ「只一聲の内に生るゝ。」ツキ「彌陀の教へを身に受けて」とソキへ向き。「此界一人念佛名」の地になりて。床几を立ち靜かに作物より出で。「上品上生に。至らん事ぞ嬉しき」と。ツキに合掌し。クセになりて。「蹴鞠の庭の面。四本の木蔭枝垂れて」とさしまはし見て。「暮に數ある」と鞠を蹴る心にて拍子一つ踏み。「沓のおと」と耳傾けて聞く。書きて見れば何でもなけれど。上手のするを見れば味いふべからず。この道の秘傳となり居る處ぞと聞くも。げにこそと思はるゝなり。

「柳櫻をこきまぜて」より上扇大左右かたの如く。「手飼の虎の引綱も。長き思に楢の葉の」と。左の手にて引綱を取り。右の手にて其端を持ち添ふる心にて。左の方に手飼の虎を見つゝ。正面より右の方へ引きつゝ廻る形は。此クセの中にて沓の音に劣らぬ仕ばえ見ばえのある處にて。何もなき處を手にてつかみ。何もなき處を見て。何もなきものを引き行くなれども。忽ち其何もなき處に。赤き首玉など掛けたる愛らしき小猫の。鈴ふりならしつゝ引かれ來るさま。幻の如くあらはれいづるこそ不思議なれ。むかし或るやんごとなき御前にて何がし太夫の之を舞ひたりしに。折しも籠の内より猫を押し出だしたる女房のありしかば。やがて其引綱をとらへ。手飼の虎のといふ文句の形をせしといふ話は。名高き事なれど。鹹の虎の意味の處に猫を代用したらばこそ時の興ともいふべけれ。もと手飼の虎とは猫なれば。猫の所作に猫を用ひたりとて何のおもしろみかあらん。無きを有りと思はするこそ能の本意なれば。かゝる世俗の美談とする事は取るにも足らぬ事といふべし。

あだし事はおきて。「是は老いたる柳色の」と拍子あり。「狩衣も」と左の袖を見。「風折も」と角へさしてゆき。「風にたゞよふ」と少しよろめく心ありて左へ廻り。「氣力なうしてよわ〳〵と」と。正面いて、作物の右の方へたじ〳〵と下り。「立ち舞ふも夢人を。うつゝと見るぞはかなき」とワキへ向ひ留むる。このたじ〳〵と下る處。梅若實は作物の柱につかまりて留めたり。

かくてコヒアヒにて「敎へ嬉しき法の道」と歌ひ。「迷はぬ月につれてゆかん」の地にてくつろぎ序の舞となる。此舞は舞ふ心持にては本意に叶はず。朽木の柳の風に靡く心を專一とすべしなど。古人は敎へたり。さりとて舞はぬ心持になりては。拍子にも合はず面白くもなかるべければ。師も之を傳へがたく。熟してそこに至るにあらでは得がたきわざなるべし。

實のを見たりしが。序より掛り初段オロシまで常の如く。大左右の

序の舞

青柳の舞

拍子すみて右へ大きく廻り。仕手柱にて直にワカとなりたり。舞をはり左右打込すみて。「柳の曲も歌舞の菩薩の。舞の袂をかへすも。上人の御法を受け。と。ワキに向き出て丶真ン中に座し。「よろこぶ報謝の舞も。これまでなりと名殘の涙の」としをり。「いとま申さんと。夕つけの鳥も鳴き」と。面伏せ別を告げて立ち。「わかれの曲には」「柳條をわがぬ」と開き。「手折るは青柳の」「姿もたをやかに」と。角にゆき柳を折る心にて扇左に取り。左に廻り仕手柱先へ出て丶。「たゞよふ足もとともよろ〳〵よわ〳〵と」と跡へ下り。「たゞれ伏柳」と安座し。「假寐の床の草の枕の」と扇顔にあて丶枕となし。「一夜の契りも他生の緣ある上人のみのり」と。ワキに向き。「西ふく秋の風うち拂ひ」と。ハヤ扇して風の吹くを思はせ。「露も木の葉もちり〳〵に。露も木の葉もちり〳〵になりはて丶。殘る朽木となりにけり」と。さして右へ廻り仕手柱にて開き留むるが通例なれど。梅若實の作物に入り右の袖かづきて安座し。大小の殘留にしたるは面白かりき。名づけて朽木留といへり。

柏崎

シテ　柏崎殿の妻
深井　葛　葛帶　箔　唐織　唐織の下に腰卷　腰帶
後は唐織ぬぎ水衣を着扇懷中し笠を持つ
物着に水衣をぬぎ前折烏帽子長絹となる
子方　花若
角帽子　頭斗目　水衣　腰帶　扇
ワキヅレ　善光寺の從僧
子方に同じ
ワキ　小太郎
能のしをり　五の卷

駄斗目　大口　掛素袍　腰帶　扇　笠

守を懷に掛け文懷中す

柏崎殿といふ人訴訟の事ありて其子花若を引き連れ鎌倉に上りゐけるが。ふと風の心地にわづらひて空しくなりしかば。花若は之を悲しみて剃髪せり。よりて小太郎といふ從者。亡き人の形見と花若の文とを持ちて故郷の柏崎に歸り。柏崎殿の奥方に見せたるに。思はぬ事とて悲しむ事甚しく。いつしか狂氣して家を立ち出て。夫の菩提を祈り。花若のゆくへを尋ねんとて。信州の善光寺に詣でたるに。親子めでたくこゝにて廻りあふ事を作れり。狂女物の内にも。半は死したる夫を戀ひ。半は世にある我子を思ふ物ぐるひなれば。ことに心深かるべく。夫を戀ふるとても。班女などの如く浮きたる契にはあらで。正しき道の情なれば。花やかならんよりも實體なる處つよかるべく。さりとて籠太皷の如き作略めきたる物語にもあらず。又花筐のやうに貴人に對する趣とも異なり。これらの事に注意して。柏崎は柏崎と仕分け見わけてこそ能のおもしろみはあるべけれ。太皷なし。季節は初冬。地は始め越後。後信濃。

シテ出づ

嚏子方座に着くと。シテ出でゝ地謠の上に床几に掛り居る。但し流儀によりてはワキの案内ありて幕より出づるもあり。

次第にてワキ出づ

次第にてワキの小太郎笠着て出て。「夢路も添ひて故郷に〳〵。歸るやうつゝなるらん」と歌ひ。笠脱ぎ正面むきて。「是は越後の國柏崎殿の御内に。小太郎と申す者にて候。さても頼み奉りし人は。訴訟の事候在て。在鎌倉にて御座候ひしが。只假初に風の心地と仰せ候ひて。程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も。同じく在鎌倉にて御座候ひしが。父御の御別を歎き給ひ。いづくともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に。御形見の品々を取りそへ。

道行

レチに對面す

只今故郷柏崎へと急ぎ候」と名のり。又笠着て道行を歌ふ。

道行すみ笠ぬぎて着ゼリフあり。「鎌倉より小太郎が參りて候それそれ御申し候へ」といへば。シテ「何小太郎とは。もし殿の御歸りありたるか」と。ワキに向き問ひたれども答へねば。「あら珍しや何とて物をば申さぬぞ」と更に問ふ。ワキ「さん候これまでは參りて候へども。何と申し上ぐべきやらん。更に思ひも辨へず候」と面伏せ兩手つくを見て。シテ「あら心もとなや。物をば申さてさめ〳〵と泣くは。さて花若が方に何事かある」と問ひ返す。ワキ「さん候花若殿は御遁世にて御座候」と先づ花若の事のみ告ぐ。この答こそ面白けれ。シテ驚きて。「何と花若が遁世したるとは」と根を押し。「さては父の叱りけるか。など追手をば掛けざりしぞ」と詰問して。しッかりと見込み居ると。ワキこゝに於て最早告けざるべからず。「いや左樣にも御座なく候」と答へ。「さま〳〵の御形見を持ちて參りて候」

ロンギ

といふ。シテ「なに樣々の形見とは。さては花若が父の空しくなりたるな」と力強く言ひ放し。「このほどはそなたの風もなつかしく。便りも嬉しかりつるに」と正面むきて歌ひ。「形見を屆くる音づれは。中々きゝても恨めしきぞや」とワキを見。「たゞ假初に立ち出てゝ。やがてといひし其ぬしは」と正面直し。「昔語に早なりて。形見を見るぞ涙なる」と打ちしをる。

それよりロンギになりて。シテ「さてや最期の折節は。いかなる事か宜ひし。委しく語りおはしませ。せめては聞いて慰まん」とワキへ向き。ワキ「たゞ故郷の御事を。覺束なく思召し。御最期までも人知れず。ひそかに御掟ありしなり」とシテは正面直して聞き。シテ「げにやさこそはおはすらめ。三年はなれて其のちは。われも御名殘。いつの世にかは忘るべき」とワキへ向き。ワキ「御ことわりと思へども。歎きを留めおはしまし。形見を御覽候へ」と。襟に掛

けたる守をはづし形見の品の心にて持ち來るを。シテは受け取り右に持ちて。「げにや歎きてもかひなき世ぞと思へば」とワキを見。「形

見を見るからに。すゝむ涙はせきあへず」と。守を見てしをる。ワキ又「花若殿の御文の候。これを御覽候へ」とて持ち來る時。シ

花若の文を讀む

テは持ち居る守をそと右の方に捨て。文を受け取りて正面むき披き讀む。その文句は。「さても〳〵父御前。痛はりつかせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心の内の悲しさは。只おぼしめしやらせ給へ。我も歸りて御有樣。見まゐらせたくは候へども。思ひ立ちぬる修行の道。もしや留められ申さんと。思ふ心を便りにて。心づよくも出づるなり。命つれなく候はゞ。三年が内に參るべし。さま〳〵の形見を御覽じて。御心を慰みおはしませと」と讀み終り。「書いたる文の」と顏上げて。「うらめしや」と又文を見。「なからん父が名殘には。子程の寶あるべきか」と。文を顏に押しあてゝ泣く。情せまり涙湧き。心はや狂せんとす。誰かあはれを感ぜざらん。

「父が別れは如何なれば。悲しみ修行に出づる身の。などや生きてある。母に姿を見々えんと」と。諫すゝみ。シテは床几を立ちてつか〳〵と三四足前に出づる時。

中入

子方協僧出づ

一撃にて徒ッテ出づ

ワキは入りかはりて地の前にゆき下に居。シテは足とめ。「おもふ心のなかるらん」と。さも恨めしげに文にて右の膝を一つ打ち。「うらめしの我子や」としをり。「うき時は。恨みながらもさりとては」と諫しまり。シテも心しづめて文を疊み懷中し。「わが子のゆくへ安穩に。守らせ給へ神佛と。祈る心ぞあはれなる」と。仕手柱にて正面へ合掌し。返しに中入す。

僧躰の子方を先に立てゝ脇僧出て來り。舞臺にて信濃の國善光寺の住僧なるよしを名のり。是なる人は愚僧を賴むとの事なれば。師弟の契約をなし出家させたりと述べ。今日も又如來堂に伴なひ申し候といひて。二人脇座に着き居ると。後ジテ一聲にて出づ。水衣なる旅裝束の躰。笠をかたげたるは狂氣せる趣と知るべし。

橋掛一の松にて留め右の方受け見て。「是なる童部どもは何を笑ふぞ」と歌ふ。道ゆく人の狂氣な躰を見て指さし笑ふに向ひて言ひかくる心なり。人々は猶氣ちがひよ〳〵と言ひ止まざれば。「何物に狂ふが

カケリ

をかしいとや」と問ひ返し。「うたてやな心あらん人は。とひらひてこそたぶべけれ。それを如何にといふに。夫には死して別れ。只ひとり忘形見とも思ふべき」と。理窟を述べかけしが。又狂氣亂れたる心にて。「子のゆくへをや白糸の」と舞臺に入り。「亂心や狂ふらん」と乘込拍子ふみ。カケリとなる。カケリは狂ひあるく有樣を見せたるにて。角より廻り大小前にて小廻し。正面へ乘り込み。右へ廻り仕手柱にて留むるだけの形なり。されど狂女物には狂亂と見え。修羅物には合戰と見ゆるなど。その物によりて勇ましくもあはれにも見なさるゝなど。奇といふべし。

サシ

それよりサシになりて。「げにや人の身のあだなりけりと。誰かいひけん空言や。又思ひには死なれざりけりと。よみしも理りや。今身の上に知られたり」など述懷の文句ありて。「うき身は何と栢の葉の。柏崎をば狂ひ出て」と詰足し。是より道行の謠となりて。「越後の國

道行

府に着きしかば」と据拍子ふみ。「人目も分かぬ我姿。いつまて草のいつまてと。知らぬ心は淺衣」と。正面いて。「浦はる〳〵と行く程に」と向ふを遠く見て詰め。「松風遠くよびしきは。常磐の里の夕べかや」と橋掛の松をさして見。「我にたぐへてあはれなるは此里」と拍子ふみ。「降れども積らぬ淡雪の。淺野といふは是かとよ」と。笠を上げて正面へ行き。おろして左の手を掛け。面つかひて雪を見わたす心あり。「西に向へば善光寺」と脇座の方より仕手柱へゆき。「わが狂亂はさておきぬ」と拍子ふみ。「死して別れし夫を導きおはしませ」と。正面先へ出て下に居て笠を下に置き合掌す。如來堂の內陣に座したる心なり。

ワキに咎められる

ワキ之を見て。「いかに狂女。御堂の內陣へは叶ふまじきぞ急いて出て候へ」と叱れば。シテは。「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂とこそ見えたれ」と理屈いひながら仕手柱へのくを。ワキ「これは

不思議の物狂かな。そも左様の事をば誰が教へけるぞ」と問ふ。シテ猶も答辯して。「教はもとより彌陀如來の。御誓にてはましまさずや。唯心の淨土と聞く時は。此善光寺の如來堂の。内陣こそは極樂の。九品上生の臺なるに。女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば。如來の仰せありけるか」とワキへ向き。「よし人々は何ともいへ」とさしまはして諸人を見わたし。「聲こそしるべ南無阿彌陀佛」と正面に合掌し。地に渡して。「頼もしや」と拍子ふみ。角取りまはりて。「是ぞ西方極樂の。上品上生の内陣にいざや參らん」と正面にて開き。「光明遍照十方の」とさしわけして右へ廻り。「常の燈影たのむ。夜念佛申せ人々よ」と。正面先に出でゝ安產し。「夜念佛いざや申さん」と。笠にて拍子取り自分も念佛せんとする心を示す。この間に後見前折烏帽子長絹を持ち來り前に置くと。シテは之を兩手に持ちてワキへ向ひ。「いかに申し候。如來へ參らせ物の候。此烏

帽子直垂は」と見て。「別れし夫の形見なれども」と又ワキへ向ひ。「形見こそ今はあだなれ是なくは。忘るゝひまもあらまし物をと。よみしも思ひ知られたり」と正面にて歌ひ。「之を如來に參らせて」と又長絹を見。「夫の後生前處をも。祈らばやと思ひ候」と歌ひ。物着となる。

先づ法樂の舞を舞ふ心にて。其烏帽子長絹を着。笠は捨てゝ扇を持ち。「あらいとほしや此烏帽子直垂の主は。よろづ何事につけても晴からず。弓は三物とやらんを射そろへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。いて人々に亂舞まふて見せんとて。鎧直垂といだし。衣紋うつくしくきないて。縁塗とつて打ちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつとり」と指し廻して。「鳴るは瀧の水」と歌ふ。此鳴るは瀧の水は。夫の舞ひたる曲の文句を思ひ出だし歌ふ心なり。

舞グセ

クリになりて仕手柱にゆき。「九品蓮臺の花散りて」と正面へ開き。「異香みちく〳〵て人に薫じ」と指して右へ廻る。大小前へ行き左右して留めサシとなる。

クセは舞グセにて。「猶人間の妄執の。晴れがたき雲の端の。月の御影や明らけき」と角にて見上げ。それより左へ廻り。「煩悩のきづなに。結ぼゝれぬるぞ悲しき」としをり。「罪障の山高く」と正面へ出て上を見。「生死の海深し」と下を見。右へ廻りて正面へ出て。左右打込ありて扇開き。「されば始めの御法にも」と扇上げて開き。大左右打込などありて右へ廻り。「尋ぬべからず此寺の」と胸ざしゝて開き。御池の蓮の。得ん事をなどか知らざらん」と。さしまはして池の蓮を見わたし。角取り廻り來りて「寶の池の水」と拍子ふみ。「功德池の濱の眞砂」とさして出て面つかひて見わたし。「玉の床」と正面を見。右へまはりて。「命の佛なるべしや」と拍子ふみ。左右打込

ロンギ

して。「本願あやまり給はずは」と開き。大左右打込の後。キリゝと右へまはりて。「夫のゆくへを白雲の。棚引く山や西の空の」と。仕手柱の方へ雲の扇して開き。右へまはり仕手柱にて。「望みを叶へ給ふべしと」と拍子ふみ。「稱名も鐘の音も」とさしわけして角にて扇かざし。左へ廻りて正面出て。「南無歸命彌陀尊」と跡へ下り。安座合掌して深く祈念を凝らす躰なり。

打切にてロンギとなり。地より「今は何をか包むべき。是こそ御子花若と。いふにも進む涙かな」とワキを代表して歌ふ。シテ「我子ぞと。聞けば餘りに堪へかねる。夢かとばかり思子の。何れぞさても不思議やな」と子方を見る。地「共にそれとは思へども。かはる姿は墨染の。」シテ「見しにもあらぬ面忘」と又子を見。地「母の姿もうつゝなき。」シテ「狂人といひ。」地「衰へといひ。互にあきれてありながら」と。シテは扇ひらき立ちて招きながら子の側へゆき。

「よく〳〵見れば」と左の手にて子を抱くやうにしてとくと顔を見。雨手そへて仕手柱まで連れゆき。子は橋掛の方へ歸り。シテはかざし廻りて。「その母や子に逢ふこそ嬉しかりけれ」と。イウケン扇して拍子ふみとむる。始の悲しみに引きかへて喜の心もて歸りゆくなれば。見る人々も雨雲やぶれて月の光を仰ぐ心地こそせめ。されども遂に歸らぬ父あるを思へば。涙ほす間はあらざるべし。故に古人は柏崎をもつて哀傷を旨とすべき能なりといへり。

望月

シテ　小澤刑部友房
直面　熨斗目　紫袍上下　小サ刀　扇
後は紫袍の下(又は火口)に厚板を被り白鉢巻し赤頭に金扇挾みたるをいたゞき紅の隈面す

ツレ　花若の母
深井　葛　腰帯　唐織着流

子方　花若
猩　火口　扇

ワキ　望月秋長
熨斗目　火口　掛紫袍　腰帯　小サ刀　扇　笠

アヒ　太刀持
狂言上下　腰帯

信濃の國に安田の莊司友治といへる人ありて。望月の秋長と口論し。殺害せられて其家斷絶したるが爲め。家臣たりし小澤の刑部友房も浪々の身となり。近江の國守山の宿に甲屋といふ宿屋の亭主となりゐたりしに。友治の妻子はからず來りて泊り合はせたる折しも。敵の秋長も到着して宿を求めしかば。友房花

若を助けて首尾よく復讐せしむる事を作れり。此能を重き習事とするは。シテの位にもよるべけれど。技藝上獅子舞をむつかしき物とするが爲めなるべし。太鼓あり。季節なし。地は近江。

シテ名のる

シテ何の事もなく出てゝ舞臺に入り。仕手柱にて名のる。「かやうに候ものは。近江の國守山の宿甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃の國にて候が。さる子細候ひて此甲屋の亭主となり。ゆきゝの旅人を留め申して身命を繼ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ。御宿を申さばやと存じ候」と。それより地の前にゆき座着き居ると。次第にて子方ツレ出て。子方は舞臺の眞ン中にて。ツレは仕手柱先にて向き合ひ。「波の浮鳥すむほども。〳〵。下安からぬ心かな」と同音にて歌ひ。地返しにて二人とも正面むき。ツレ「これは信濃の國の住人。安田の莊司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は。同國の住人望月の秋長に。あへなく討たれ給ひし後は。多かりし從類もち

次第にて子方ツレ出づ

ツレ案内を乞ふ

り〳〵になり。賴む木蔭も撫子の。花若ひとり隱しおかんと。敵のゆかりの恐ろしさに。思子をいざなひ立ち出づる」と向き合ひ。又同吟にて。「何くとも定めぬ旅を信濃路や。月を友寢の夢ばかり。〳〵。名殘を忍ぶ古里の。淺間の煙たちまよふ。草の枕の夜寒なる。旅寐の床のうきなみだ。守山の宿に着きにけり。〳〵」と。脇正面受けて出て。又もとの處に歸り着く形ありて。トメの文句にて向き合ひ。正面むきて。「急ぎ候程に。近江の國守山の宿に着きて候。此所に宿を借らばやと思ひ候」といひて。二人とも脇正面を後ろにして地の方へ向き。ツレ「如何に此屋の內へ案內申し候」といふと。シテ立ちて「誰にて渡り候ぞ」といふ。ツレ「是は信濃の國より都へ上る者にて候。一夜の宿を御かし候へ」といふ。シテ「安き間の事にて候。こなたへ御入り候へ」とて。シテは仕手柱の方へ。ツレと子方は地の前へ行き違ふ時。シテはツレをとくと見て直に橋掛に

シテ我身の上を告ぐ

ゆき。一の松に立ちて。「不思議やな是に留め申して候御方を。如何なる人ぞと存じて候へば。某が古の主君の北の御方。をさなき人は御子息花若殿にて御座候は如何に。あら痛はしの御有樣や候。やがて某と名乘つて力を附け申さばやと存じ候」といひて。ツレの前にゆき手を突きて。「いかに御旅人に申すべき事の候。信濃の國よりと仰せ候に就きて。いにしへ御目にかゝりたるやうに存じ候」といへど。ツレ「いや是はゆくへもなき者にて候程に。思ひもよらぬ事にて候」とて猶告げねば。シテ「何を御包み候ぞ。まづ某名のつて聞かせ申し候べし。是こそ古へ御内に召し使はれ候ひし。小澤の刑部友房にて候へ」といふにぞ始めて其實を知り。「さては古の。小澤の刑部友房か。あらなつかしやとばかりにて。涙に咽ぶばかりなり」と。ツレは打ちしをりシテは面伏せ兩手つくと。「父にあひたる心地して」と子方立ちてシテの前にゆき。「花若小澤に取りつけば」と肩をシテの左の肩に掛くる。シテは「別れし主君の面影の。殘るも今は恨めしや」と子の顔を見。「こはそも夢か現かと。主從手に手を取りかはし」と。シテも右の手を子の左の肩へ掛け。地になりて。「今までは。ゆくへも知らぬ旅人の」と。此打切に子は本の座にかへり。「三世の契りの主從と。頼む情も是なれや。げに機緣ある我等かな」と。ツレ面伏せシテ辭儀する。

ツレと子方とくつろぐ　シテも後見座にくつろぐ

シテ「あれなる一間に御入あつて御休み有らうずるにて候」といひ。ツレと子方は一間に入る心にて笛座の樣を通り大小の後にくつろぐ。シテも後見座にくつろぐ。

次第にてワキは狂言を召し連れて出で。橋掛にて「歸る嬉しき古里に。〳〵。誰うき旅と思ふらん」と歌ひ。「是は信濃の國の住人。望月の何がしにて候。さても同國の住人。安田の莊司友治と申す者を。某が手に掛け生害させて候科により。此十三年が間在京仕り候處に。

次第にてワキ出づ

宿を取れといふ

されども緩怠なき由聞し召し開かれ。安堵の御教書を賜はり喜びの色をなし。只今本國信濃に下向仕り候。急ぎ候間。近江の國守山の宿に着きて候。今夜は此宿に泊らばやと存じ候」といひて。「いかに誰かある」と。太刀持ちたる從者の狂言を呼ぶと。狂言近く來り手を突きて。「おん前に候」といふ。ワキ「今夜は此宿に泊るべし。宿を取り候へ。又存ずる仔細のある間。某が名をば申すまじく候。」狂言「畏つて候」とて舞臺の際へゆき。「いかに此屋のあるじの渡り候か」といへば。シテ立ちて「誰にて御座候ぞ」と問ふ。狂言「これは信濃の國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ」といへば。シテ「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ」と又問ふ。狂言「これは信濃の國に隱れもない大名。望月の秋長」と言ひたるが。急に某が名をば申すまじといはれたる事を思ひ出し。「では御座ないぞ」といひて口を掩ふ。シテこれを聞き驚きたる心にて

ワキ座着く

敵の來れるを主人に告ぐ

二足引きたるが。心を靜めて「苦しからず候。こなたへ御入り候へ」といひて後見座にくつろぎ。ワキと狂言とは舞臺に入りて。脇座に座つく。笠は始め着て出てたりしを。名のる時に脱ぎ。今また下に居る時に傍に置きたり。

シテ立ちて二の松へゆき正面むきて。「言語道斷の事。我頼み申して候人の北の御方。同じく御子息花若殿此屋に留め申して候處に。花若殿御親の敵。望月が泊りて候事は候。やがて此山申し上げばやと存じ候」といひて。奥の一間へゆく心にて舞臺の方に行きかゝると。子方とツレとは詞の内に立ちて一の松あたりまで來るを見つけ。「やいかに申し候。不思議なる事の候。今夜此處に望月が着いて候」と。いはせも果てず。「何望月と申すか」と。子方は勇みて詰足す。シテは「暫く」と押し止め。「あたり近く候。まづ靜まつて聞し召され候へ」とツレに言ひ。「只今申す如く。望月が此屋に泊りて候。是は天

の與ふる所と存じ候。いかにもして今夜の内に。御本望遂せさせ參らせうずるにて候。御心やすく思召され候へ」といひて。正面むき。思案をめぐらす心にて面少し伏せたるが。「きつと思案仕りたる事の候」と面上げ。ツレに向ひ。「此頃此宿に流行り候物は盲目ごぜにて候。何の苦しう候べき。夜にまぎれ杖にすがり。花若殿に御手を引かれさせ給ひ。目くらの振舞にて座敷へ御出で候へ。某かの者に酒を進め候べし。又何にても候へ御歌ひ有れと申し候はゞ。そと御うたひ候へ」といひて。又子方に向ひ。「花若殿は八撥を御打ち有らうずるにて候」といひ。「某は獅子舞を學び」と正面に直し。又ツレに向ひて。「其まぎれに近づきて。本望を遂げさせ申さうずるにて候」としかといふ。ツレ「ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ」といひ。シテ「何事も某に御任せ候へ」といひて。三人ともに後見座へくつろぎ。子方は鞨鼓を。ツレは杖を持ちて立ち。一の松にて

ツレと子方とワキの前に出つ

二人正面むき。ツレ「うれしやな望みし事の叶ふよと。目くらの姿に出て立てば」子「習はぬわざも父のため。」ツレ「竹の細杖つきつれて。」地「かの蟬丸の古へ。〳〵。たどりたどるも遠近の。道のほとりに迷ひしも。今の身の上も。思ひはいかで劣るべき」と。此打切より盲目になりたる心にて面曇らし。手に持ちたる杖を前に突き。子方に左の袖を引かれつゝ。「かゝる浮身のわざながら。盲目の身のならひ。歌きこしめせや旅人よ。歌きこしめせや人々」と。杖つきながらしづ〳〵と舞臺に入り。ツレは仕手柱先に。子方は其後ろに立ち。シテ又その跡より入りて大鼓の前あたりに立ち。狂言の方むきて。「いかに申すべき事の候」といふ。狂言立ちて「何事にて候ぞ」といふ。シテ「此屋の亭主にて候が。めてたき御下向にて候間。御祝の爲めに酒を持たせて參りて候。然るべきやうに御申し候へ」といふ。狂言とワキとの問答ありて。こなたへと言はれ。三人下に居

ツレ曾我物語を歌ふ

ると。「是なる人達は如何なる人にて候ぞ」と狂言問ふ。シテ「さん候是は此宿に候めくらごぜにて候。かやうの御旅人の御着きの時は。罷り出でゝ諸などを申し候。御前にてそと御歌はせ候へ」といへば。狂言「日本一の事にて候。やがて申し上げうずるにて候」といひて。ワキに其よしを告ぐれば。「汝所望し候へ」と許され。「畏つて候」とてツレに向ひ。「おもしろからんずる處を一節御うたひ候へ」といふ。ツレは「一萬箱王が親の敵を討つたる處を歌ひ候べし」といふ。狂言「いや〳〵是は差合がある」といひて拒み。ワキは「何の苦しう候べき急いて歌はせ候へ」と命じ。狂言「さらば今の仰せられたる所を御歌ひ候へ」といふ。此時子方は鞨鼓を持ち來りてツレの左の手に渡す。ツレは之を持ちて打ちつゝ拍子を取る心にて歌ひ出だす。されどクセになりてアゲまでに二三度打つ形をなすのみなり。「それ迦陵頻伽は繭の内にして聲諸鳥にすぐれ」と。それより地にて。「鶯といふ鳥は小さけれども。虎を害する力あり。」ツレサシ「こゝに河津の三郎が子に。一萬箱王とて。兄弟の人のありけるが。」地「五つや三つの頃かとよ。父を從弟に討たせつゝ。既に年ふり日を重ね。七つ五つになりしかば。いとけなかりし心にも。父の敵を討たばやと。思ひの色に出づるこそ。げにあはれには覺ゆれ。クセ「ある時おとゝひは。持佛堂に參りて。兄の一萬香を燒き。花を佛に供ずればば。弟の箱王は。本尊をつく〳〵と守りて。いかに兄ごぜ聞し召せ。本尊の名をば我かたき。工藤と申し奉り。劍をひつさげ繩を持ち。我等をにらみて。立たせ給ふが憎ければ。走りかゝりて御首を。打ち落さんと申せば。兄の一萬これを聞いて。」ツレ「いわげなや。如何なる事ぞ佛をば。」地「不動と申し敵をば。工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと。拔いたる刀を鞘にさし。免させ給へ南無佛。敵を討たせ給へや」といふ時。「いざ討たう」と子方は叫

子方いざ討たうと叫ぶ

びて居立ち。小サ刀の柄に右の手かけてワキを見る。ワキも刀の柄に手を掛け。狂言は驚きて「あふ討たうとは」とワキを押しかこひ。シテも扇にて「暫く候」と子方を押し止め。「何事を御さわぎ候ぞ」と狂言にいふ。狂言「御用心の時分にて候程に。是なる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ」といひ。シテ「子細を御存じ候はぬ程に、尤にて候。此者の謠を申したる後には。又をさなき者八撥を打ち候。其八撥を打たうずると申す事にて候」と辨じ。狂言「日本一の事やがて申して打たせうずるにて候」と心解けて。又ワキに其よしをいふと。ワキ「急いて打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか」と問ひ。子方「獅子舞を御所望候へ」とすゝめ。ワキ「あら面白の事を申すものかな」と喜び。「いかに亭主。是なる幼き者の申すは。亭主は獅子舞が上手なるよしを申し候。そと一さし舞ひ候へ」と所望す。シテ「是はをさなき者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候」と辭すれども。「ひらに舞うて御見せ候へ」と望まれ。「此上は御意にて候程に。そと御前にて舞はうずるにて候。此まゝにては如何にて候間。獅子頭をかづきて參らうずるにて候。その間に此をさなき者に八撥を打たせ候べし。皆々かう渡り候へ」と。ツレ子方に向ひいひて中入す。子方は鞨鼓を受取りてツレの手を引き。ツレは下に置きたる杖を手に取り突きて立ち。仕手柱まで來るとはづして。ツレは橋掛に行き。是より目を明けたる心にて面上げ杖捨てゝ樂屋に入り。子方は後見座にて鞨鼓を前に附け撥持ちて出づると。地より「獅子とらてんは時を知る。雨村雲やさわぐらん」と歌ひ出し。破掛にて鞨鼓の舞となり。直りて一段例の如く。角より廻り來り仕手柱にて左右打込し。ヒイと笛ひしぐ時。右の手に二本一つに持ちたる撥にて幕の方を指し。からりと投げ捨て正面先に出てゝ下に居る。

ツレ入る
子方鞨鼓を舞ふ

鞨鼓の掛りは「吉野立田の花紅葉」と子方歌ひ出し。地にて「更科越路の月雪」と受取りて舞となり。舞のあとに「獅子とらてん」以下の文句あるもあり。觀世流にても昔は此方なりしかど。獅子にかゝる工合を思ひて工夫せしにや。いつよりか今の仕方になりたるは。改正中の最も宜しきものならんと覺ゆ。

笛のヒシギを合圖に半幕あがると。シテは既に裝束して幕際にあり。太鼓の打出し。露の拍子さまゝ〳〵秘事ありて。太鼓の頭だん〳〵に詰まり。シテは本幕上げて。厚板をかづき沈みて走り出で。一の松にて留まり。のびて舞臺を見込み。又沈み少し下りて。天天天天といふ太鼓の流しに連れ。舞臺へ走り込み。正面先より大小前へたら〳〵と下りて。厚板おろし兩袖とほし。ッッ天天と獅子舞にかゝる。カヽリ、地、小返、呂、大返、トメの六段を通例とす。間に干の手の入る事もあり。トメは數廻りありて眞ン中に厚板かづきてうつぶし下に居る

と。地にて「あまりに秘曲の面白さに。〳〵。猶々めぐる盃の。醉をすゝめばいとゞ猶。眠りも來るばかりなり」と歌ふ間に。起き上りてワキの眠り居るを見込み。又うつぶして「さる程に〳〵」と歌ひ。「折こそよしとて脱ぎ置く獅子頭」と。厚板と赤頭と一つに脱ぎて左の方へ押し遣り。熨斗目モギドウに白鉢卷の姿となり。「又は八撥を打てや打てと。目を引き袖を振り。立ち舞ふけしきに戯むれよりて」と。子方を兩手にて立たせ。ワキの方へ連れゆくと。ワキは笠を代りに置きて既に切戸より入りたれば。其笠をワキの心にて。「かたきを手ごめにしたりけり」と。子方は笠を飛び越えて向に。シテは笠の手前に居立ち。「この年月の恨みの末。今こそ晴るれ望月よとて。思ふ敵を討つたりけり」と。子方は刀を拔きて笠を刺し。シテは振り上げ眞向にかざして切り。左の手にて笠を左の方へ押しやり。刀逆に立てゝ二人見合はせ。「かくて本望遂げぬれば。〳〵。

敵を刺す

やり